
バカとテストとオレっ娘（笑

南斗悪斗那外名威！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストとオレっ娘（笑

【Nコード】

N79980

【作者名】

南斗悪斗那外名威！！

【あらすじ】

なんか死んでしまった秋本奈留の転生する世界はバカテスの世界！オリ主とバカテスの主要人物たちがバカ騒ぎ！！（オリ主は巻き込まれ系）

プロローグは駄文であり、読まなくても問題ないです。

プロローグ（前書き）

初めて小説を書きます。稚拙な文章ですがどうか楽しんでってください。

なにか指摘や要望や感想あったら言ってください。

プロローグ

これはバカテス知らない転生者（男の娘）が原作に介入してしま
うお話。

. . .
. . .
. . .

どうも中学二年生の秋本奈留^{あきもと なる}です。

最近ジャンプにハマっておりコンビニに買いに外にでたのですが、
その道中空から何かが頭から落ちてきて（チラッと見たのですが
植木鉢のようだ）
気を失ってしまいました。

全く植木鉢を落ちそうなところで置かないで欲しいものです。

・ ・ ・ ・ ・

じゃねえよ！？ 何冷静に自分に起こったこと説明してるの！？
てか何処だよここ どうかの事務所の個室みたいなところは・・・

普通あんな事故とか起きたら病院とかに運ばれるんじゃないかな？
なぜにただの個室？別にどこか治療を施されてるわけじゃないし・
・ ってあれ？

頭に傷とかそれっぽいものが無いんだけど当たり所が良かったのか
な？

当たった時点でよろしくないけど・・・

ガチャッ (扉をあける音)

ん？

「すみませんでした！！！」

「はい？」

いきなり入ってきて謝ってきたのは18 22に見えるスーツ姿の女だった。

（なんかダメットさんに似てるな）

「本当にすいません！こちらのミスで死なせてしまい・・・」

はっ？

「死んでる？ ていうかなんで俺こんなところにいるんですか？

そもそもあなた誰なんですか？」

死んだ？

「あー・・・自分は第一世界管理者です。第一生命世界の生命を管理するものであり、

他にもやることはありますがそれが主な仕事です。

私の名前は話してはいけないという規則があるので話すことができないです。

貴方がなぜ死んでしまったかというと、世界には人が存在・・・生きることができる数が決まっており、その数を超えてしまうと

世界に悪影響をもたらすのです。

例えば、時間がデタラメなつて過去と未来が一緒になつてしまつたりなどと

いった感じに世界の理が壊れてしまうのです。

そのようなことにならないために人には寿命が決まつており、死んだら天界や地獄に送り元の世界に余裕ができたなら記憶を消して

元の世界をに転生を繰り返すシステムがあり、それによつてバランスを保つていたのですが・・・

私のミスによつてそのバランスを少し崩してしまい、

やむなく貴方を寿命ではないのに殺してしまったのです・・・

もし寿命でもないのに死なせてしまったら

決して元の世界に再び戻る事はできなくなつてしまふんです。」

「ちょ・・・ちよつと待てよ！！　じゃあ俺はどうすればいいんだよ！

生き返ることとかできないのかよ！？」

やりたい事や、やり残した事がたくさんあったのに・・・
親孝行だっと思ってないし、友達との些細な約束もはたして
ない、

大体中学生なのにもう死ぬことになるなんて・・・
一体俺はどうなるんだ？

ていうか俺のいた世界って第一なんだ・・・何が基準かは知
らないけど

「はい元の世界で生き返らせることはできません・・・
さっきもいったように無理に生き返らせるとこれも
世界の理が壊れてしまいます。

人は決して生き返る事はできないことになっているのです。

そこでこんな事例は今まで無かったのですが、
貴方を他の管理者が務める異なる世界に転生してもらいます。」

ついでに第一世界とはすべての世界のはじまりだから第一世界と呼
ばれ

第一世界に存在する人々がいろんな物語などを想像（創造）し、
それによって無限とも言える世界、人が生まれ、
その新しく生まれた世界にいる人がまた想像し、世界、人が生まれる
という無限の連鎖を起こしていて
今こうしている間にも世界は増えているらしい。

そしてどうして最初の世界ができたにかは誰にもわからないようだ。

……話の内容がでかすぎるよ

「それで俺はどうか違う世界に転生できるんですね。
どんな世界にいくんですか？」

ランダムで決まるのかな？

「貴方の世界にある物語の世界に第・・・世界に転生してもらいます。」

（あまりにも途方もない数字なため省かせてもらいます）

バカとテストと召喚獣って世界がベースのようですね。

ですがただ転生させるだけでは
こちらの面目が立ちません。何か転生する際にいくつか願い事を叶えましょう。

後世界が崩壊させるほどの力みたいなのはさすがに無理ですよ。」

バカとテストと召喚獣は名前とあらずじぐらいしか知らないなあ。
けど自分がいた世界とそう変わらなかったはず。
そういう世界じゃあ力とかあんまりいらないよね。
かめはめ波！とか中二っぽい事やってみたいけど絶対使わないよ
な……

やっぱりお金とかかな？けど一生遊んでける金をくれとか、
何かめっちゃいいづらい……

ほら欲望深いとかガメツイとか思われそう……

あ、そうだ

「俺の親とかに遺言かなんか残してくれない？
それと

俺の両親、俺なんか本当に色々尽くしてくれたんだ。
それなのにいきなり俺死んだとか聞いたらショックなんじゃないか
な。

自意識過剰かもしれないけど、
後は俺の転生する世界で 楽しい生活ができるようがしたい。でき
るかな？」

「遺言程度なら残せます。どんな遺言を残しますか？」

「遺言は」………」です。」

「分かりました。この度は真に申し訳ありませんでした。

新たな人生をどうか幸せに過ごせることを願っています。」

ぬおっ！？急に意識が飛ん……で……

管理者 side

願い事があんなしょぼいのじゃ私が納得いきません。
なので私が勝手に都合のいい願いごとを増やしましょう

ブログ（後書き）

おもってた以上に時間かかるしつかれますね！
こんな文章に2時間もかかりましたよ！！！！

主人公紹介（更新11/10）（前書き）

主人公の挿絵書いてみました。

模擬試験やっていて20分も時間あまったので問題用紙の裏に書いてました（笑）

まあ問題が解けなくて早く終わったただけですがねwww

あんまり絵はうまくないけど勘弁してください；；

写メなので画質があらかったので少しだけPCで編集しましたがやっぱり画質が粗い；；

申し訳ないです。　いつかきれいな画像をUPしてやる・・・！！

キョん子をイメージして書きました。

キョん子かわいいよキョん子・・・

ちなみにどっかに合った画像を

記憶の奥底から思い出して書いただけなんですよね；；

服も大体記憶だけで書いてみました。（違ったらあとで直そうかな）

主人公紹介（更新11/10）

主人公

秋本奈留

昔から何かと厄介事に巻きこまれ気味（某幻想殺しの軽い不幸・verと思ってくれるといい）

男なのに艶のある髪の上に女顔で肌もベビースキンであり

私服を来るとだれもが美少女と見間違えう程である。

本人は髪を短くしたいのだが両親が髪を毛切るのならお小遣いをやらん！とのこと

お小遣い欲しさに切るのを断念している。

勉強の出来はBクラス以上、Aクラスの平均以下（150 220）
といったところ

一つの科目に絞って勉強すればなんとか400点はとれるかもと言ったところ

基本めんどくさがり屋で辛口気味なのだが、餓死しそうな明久に弁当をときどき作ってやるくらい
根がやさしい。（微妙かw？）

その事でまた色々な事が起こるのだがそれは別の話である。

原作開始時（高校2年）

.....

身長164cm (これ以上伸びませんw)

体重49kg

年齢16歳

誕生日3/2

容姿

キョン子です。(挿絵見てね)
> i 1 3 8 5 8 — 1 9 3 1 <

容姿は前世から同じ

特技

スポーツ全般、歌、演劇

スポーツは元々得意というわけでも苦手でもなかったのだが管理人が勝手に願いを付け足したおかげで運動神経バツグンになった。単純に運動神経だけで見るとなら鉄人並みとっていい。(筋肉はあまりないから)

100m走 12秒台後半

バスケットでダンクを楽に決める。

サッカーでキャプテン翼ばりのオーバーヘッドキックを決めれる。

喧嘩も雄二にすこし劣る程度のみよさ。

などなどである

歌は前世からセンスがあり、趣味として今もときどきカラオケなどで歌っているの、さらにうまくなった。ちなみに音符はよめない。

演劇は秀吉に劇前日に部員一人が病気で倒れたので代役を頼まれたのがきっかけで、隠された才能が発見された。

召喚獣

武器 ハルバード（日本でいう斧槍）

腕輪能力

これから決めようと思う（オイ

容姿

奈留をデフォルメにした感じ

おいおい挿絵を書くつもりですw

主人公紹介（更新11/10）（後書き）

すこしずつ紹介の内容を増やしていく予定です。

2日に一回は投稿したいですね。（意思の弱い俺にできるかな？）

第一話（修正11/10）（前書き）

目がああああ目がああああああw

あーどうも「南斗悪斗那外名威！」です。

主人公の名前をナルって書くことにしました。

奈留とか分かりづらい気がするのでw

基本原作と同じ流れで書いていきます。

ときどきオリジナルの日常編とか入るといふ形で行こうと思っています。
ます。

ではゆっくり読んでいってくださいねー

第一話（修正11/10）

どうも、色々あって死んで転生することになったナルです。

自分に今の状況を言うとなんか周り真っ暗です。

目が開く感じがしないし音も聞こえないです。

なんかこわいんだけど。

あれー？おかしいなあ転生するはずなんだけどな自分。

というか転生ってどうやるのかいつ終わるとか聞いてなかったOTL

悩んでいるうちにナルは急に下の方に引っ張られた。

ぬああ！？なんだなんだ！？

5 10分程下に引っ張られ続けてたら急にまぶしくひんやりとしたところに出た

まぶっ！なにが起きたんだ！？

「オギヤアアアアアアアア」

ん？なんか赤ん坊っぽい声が出たぞ！？
一体なんなんだ！？

「おめでとございます。元気な男の子ですよ」

んー？これってまさか赤ん坊から始まるのか？

えっ！――！！？？！？？！

「よくがんばったぞ！ 律子！ しかし男の子が生まれたか。
なら名前は奈留、秋本奈留だ。 よーしよし私が父さんだぞー」

あれ？父さん？なんでここにいの？

自分が知ってる父さんよりすこし若いけど・・・いや元々見た目若かったけど

それ以上に若いな。それに律子って俺の母さんの名前だよね。もしかして…

「奈留：いい名前ね。本当に可愛らしいわね。ナル、私が母さんよ」

やっぱり母さんだ…！

でもなんで？あれかなパラレルワールド？だっけ？あれみたいな物かな。

管理人いわく人が世界を創っているとの話だけど…

自分の知ってる親かどうかは分からないけど。

前世では親孝行の一つもできなかったから…

できるだけ親孝行して樂をさせてあげたいと思う。

「オギヤーオギヤーアア！」

「あらあら元気な子ね。フフフ」

「そうだな、元気に育ってくれそうだ」

オギヤアアアア

オギヤアアアッアアア . . .

. 泣き声が止められない ; ; ;

.
.
.

やあ、キングクリムゾン（よく知らない）で時間を飛ばし16歳に
なった。
ナルです。

俺は近頃、召喚システム？で有名になっている文月学園に入学して
高校2年になったばかりである。

何故文月学園に入ったのかというと、ひとえに学費等が安いからである。

決して家が貧乏ではないが、むしろ金はあるほうだ。

あんまり親に金を使わせたくないのだ。

・・・つとまあ正直これは建前のようなもので
実際は召喚獣とやらを見たかったのだ。

え？いきなり高校2年まで飛ばすなんて無理がある？
いやいや確かに色々あったよ？

赤子の頃は人には言えないような恥ずかしいことされまくったし。
(仕方無いのだけどね)

幼稚園になってそれなりに自由ができたが、さすがに幼稚園児達と
遊べるほど

精神年齢は低くないのでストレスが溜まっていく一方だったし
親(主に母さん)に女装させられるし…

抵抗して逃げたら次の日、目覚めたら女装させられてたり、
数少ない男物の服がなくなつて女物しかなかったり。

髪の毛も切らせてもらえず伸ばしている。

小学生の時も幼稚園の時と基本変わらなかった。

まあ女装だけは小学校からそのようなことやってると

苛めの対象になったりするなどの理由で辞めさせてもらったが。

しかし髪の毛は相変わらず切らせてもらえない。

小学校に入ってから月1000円お小遣いをもらえるのだが、切るのならあげないわよ

と母さんにいわれて断念した。

だって使い道なくてもお小遣いって貰わないと気がすまないでしょ！？

思わない？そうですか。

（ちなみに女装していなくても女の子として接しられていたのは周知の事実である。）

中学校の頃にはお小遣いが5000円になったことと土屋康太という親友ができた事以外変わったことはない。

康太と知りあつた理由は、階段から転び落ちた時に助けてもらったのがきっかけだ。

抱きかかえるよう受け止められ助けてもらったのはいいものの康太から水鉄砲のごとく鼻血が吹き出して軽い騒ぎになった。

しかしなんで急に鼻血がでたんだろう…？

まあそのまま中3になり文月学園に受験し、合格したのだ。高校1年の間のできごととはまた今度説明するとして…

.....

そして今、俺は2年のクラス分けの為に、クラス振り分け試験を受ける為に学校に登校している。

ん？ あそこにいるのは高1の時同じクラスだった吉井明久と坂本雄二か？

「よし明久テスト前の小手調べだ！

三権分立は司法と立法ともう一つは何で成り立つか？」

どうやらテスト対策をしているようだ。

雄二が明久に問題を出している。しかし、簡単な問題だな。

これくらいなら明久でも答えられると思うんだけど。

しかし、あのバカで有名な俺の友達、明久と雄二がテスト勉強をしているのは

どこかシニールに見える。

なんにせよ、少しは勉強しているみたいだな。

明久「ふ……あまり僕を見くびらないでくれよ雄二…

二つまでは絞れる」

二つ？

雄二「ほう？」

「憲法か漢方のどっちかだったはず……」

「……………行政だ。」

やはりバカはバカだったようだな。

「あ、それじゃウチからも！」

島田美波か。ドイツのから来た帰国子女でこれまた同じクラスだった人物だ。

「では基礎問題！ CH_3COOH とは何でしょう？」

「……………」

英語は苦手なんだ。」

「え…………？これ英語じゃなくて科学「じゃあ僕こっちだから！」
ちょ、ちよつと吉井！アンタ相当やばいんじゃない？」

…………明久お前は絶対Fクラスだ。

「よう。相変わらずだな明久は。」

「おお、ナルか。まあ明久が急に勉強ができるようになったらびっくりだな」

「あら、おはよう。秋本（相変わらずそこの女子より可愛いわね
実は女ですって言われた方がまだ信じられるわ）

・・・吉井ったら誤魔化して逃げるなんて……」

「まあ俺も明久と同じクラスでテストだから。じゃ！またな。 テ
ストがんばれよー」

「お前もなー」

さてテスト頑張りにいきますか！

.....
.....

クラス振り分け試験直前

「さあ、勉強道具をしまい必要な筆記用具だけを出してください。」

9時になり鐘がなったらテスト開始です。」

ふう、それなりに勉強したからBクラスはいけるかな。

キンコーンカーンコーン・・・

先生「では始めてください」

まずは名前を書いてと……

ふむ、難しいと言われている振り分け試験だがなんとかいけそうだ。

いける！

カリカリ　カリカリ　カリカリ・・・

「ハア…ハア……」

ん？なんか荒い息がいこえるんだけどなんだ？

フラッ

ツカ（ペンを落とした音）

ガタンッ！！

「姫路さんッ！」

オロ？姫路さんがどうしたんだ？

先生「試験途中での退席は――――無得点扱いとなるが
それでいいかね？」

すこし厳しくないかい先生？

明久「ちょ、ちょっと先生具合が悪くなつて

退席するだけでそれはひどいじゃないですか！」

明久が姫路さんのために弁護している。

人のためにそのようなことを言えるのは明久の長所だな。

しかし、まあそういうルールと決まっていたなら

先生に何を言っても仕方ないが：

と姫路さんの方を軽く向きながらそのようなことを考えていたのだが、

試験中に横を向いた罰が当たったのか、

開いてる窓から野球ボールが飛んできて見事に俺の頭に直撃した。

「ゴフッ!？」

ガタッ バタンッ

「ちょ!？ ナル大丈夫!？」

明久が俺の事を心配して声を掛けてくれたようだが、
意識が途切れかけてる俺に聞き取れるほどの余裕はなかった。

こうして俺の振り分け試験が速攻で終わり俺がFクラスに入る事が決定し、

とても騒がしくそして楽しい日々のはじまるのだった。

「なんでだあああああ！！！！！？」

と男の娘が叫んでいた気がするが気のせいだ（笑

第一話（修正11/10）（後書き）

ああー誤字脱字 変なところあったらビシビシ指摘してくださいね

第二話（前書き）

結構原作から文章ばかりでした。

第二話

バカテスト／化学

「第問1」

問 以下の問いに答えなさい。

【調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。】

姫路瑞希の答え

「問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。

合金の例……ジュラルミン」

教師コメント

正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんはひっかりませんでしたね。

土屋康太の答え

「問題点……ガス代を払っていなかったこと」

教師コメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

「合金の例……未来合金（すごく強い）」

教師コメント

すごく強いと言われても。

秋本奈留の答え

「問題点……マグネシウムは火にかけると酸素と反応するから危険。
合金の例……ナトリウムカリウム合金」

教師コメント

空気や水との接触によって発熱・発火・炎上・爆発に到るのでマグ

[illegible]

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。決して俺は桜を見る趣味はないのだが、この花びら舞い散るこの道に目を奪われていると。

後ろから肩を軽く叩かれた。

「おはようなのじゃ。ナル、結構はやい時間に来たのう。」

38

…… またも同じクラスであつた友人、木下秀吉だ。

互いに女と間違えられるという共通の悩みがあるせいか、妙に仲良くなつてしまつたのだ。

「おう、おはよう。そういうお前も早いじゃん。まあ秀吉はいつも早いけどな。」

そのまま一緒に歩いていると校舎の入口で立っている、いかにも体育教師然とした男に呼び止められた。

生活指導で厳しい事で有名な西村先生だ。

「おはよう、秋本、木下。」

「「おはようございます、西村先生」」

挨拶を交わしながら西村先生は箱の中から二つ封筒を取り出し、俺達に差し出してくる。

宛名の欄に「秋本奈留」、「木下秀吉」と、大きく書かれていた。

なんだこれ？

「なんですかこれ？」

「これにはお前らの入るべきクラスが書かれている用紙が入っている。」

「なるほど……しかし、面倒な発表の仕方ですね。」

クラスと聞いてすこし気が重くなった……

「俺だって正直めんどくさいが、この学校は世界的に注目されている最先端システムを導入した試験校だからな。こんな変わったやり方もその一環ってワケだ。」

「別にそんなことしなくてもいい気がしますけどね。まあ事情があるんですかね。」

正直無意味な気がする。

「同感だ。」

先生もそう思っていたのか。

「まあ、そんなことより俺はお前がそれなりの優等生なのに実力を

出すこともなく、Fクラスに入る事になってしまったことが非常に残念でならない……………」

「言わないで下さいよ……………結構その事で落ち込んでいるんですから。」

「なんじゃ？お主ともあろう者がFクラスなんぞに入るのじゃ？お主ならBクラスは堅いじやろうに。」

秀吉が封筒を開き苦虫を噛み潰したような顔をしながら、俺に疑問をぶつけてきた。

「ああ……………実は試験中に開いた窓から野球ボールが何故か飛んできて頭にぶつかり……………あとは察してくれ……………」

「それは……………ご愁傷さまなのじゃ。ワシもFクラスじゃった……………しかしこういつては何じゃが、お主がFクラスで嬉しいぞい。同じクラスに友達がいなかったら寂しいからの。」

「それに関しては俺も同感だな。じゃあ西村先生俺達教室に行つてますね。」

そう俺は言い残して教室に向かった。途中Aクラスを覗いてみたが、あんな教室と認めない。高級ホテ

ルかなんかだと言われた方が信じられる程に豪華な部屋であった。

Aクラスというだけでここまですごい教室が使えるのか。下位のクラスになっていく程教室の質が下がっていくのはしっていたが。これだと最下位のクラスはどのくらいひどいのか分かったものじゃないな。

卓袱台と座布団で床は畳だったりして。

ないな仮にも教育機関なのだ。少なくとも勉強ができる程度の質はあるだろう。

「すごいこのAクラスは、どこかの高級ホテルみたいじゃのう。」

秀吉も俺と同じことを考えていたな。

そしてFクラスの扉を見つけ、俺は扉を開けた。

卓袱台と座布団に畳が並んでいて落書きがびっしりと書き込まれており、窓は割れていて天井には中々でかいクモの巣が堂々と張られている光景が目の前に広がる。

もわっと、カビ臭いにおいがしてきた。

冗談で思っていた事がさらにひどい状況として再現されている教室がここにはあった。

俺は急に目眩がしてきて倒れそうになった。

クラッ…

「なっ、ナル！大丈夫かの！？」

倒れそうになった俺を秀吉が支えてくれた。

「あ、ああ……………大丈夫だよ。ありがとう。」

あまりの教室の酷さと臭いで思わず気を失いかけたよ。
これって裁判訴えられるんじゃない？

「おい大丈夫か、ナル。まあ、この教室をみて倒れなくなる気持も
理解できるがな」

何故か教卓に立っている雄二が俺を心配して声を掛けてくれた。

雄二は、背が高くやや細身だがむしろボクサーのような機能美を備
えた感じがする体の持ち主だ。

顔は意思の強そうな釣り目気味の野性味がする顔にたてがみのよう
な髪型をしている。

教卓に立っているが妙にその姿は似合っておりカリスマのようなも
のを感じる。

……俺、管理人に容姿を変えてもらうように言えばよかった。前世から女みたいな顔に体の俺には雄二みたいな人が羨ましい。

くそうっ……！！

「大丈夫だよ。というかこの教室の酷さには驚いた。本当に学校はこれでいいのか？あとなんで教卓に立っている。」

「さあな、おまえこそなんでFクラスにいるんだ？。もっと上位のクラスに行くと思っていたんだが。あとそれは俺がクラス代表だからだ。まあ実際はなんとなくだが。」

「へえ。雄二が代表か頼もしいじゃんか。…さっきもその話を話していたんだけど、まあいいや。
簡潔にいうと、試験中、窓からボール、俺頭ゴフツ、だ。」

「……………運が悪かったな。」

「……………ハアアアアア」

……………
……………

side Fクラス一同

ざわ……ざわざわ……ざわ……

おい、秀吉とナルちゃんがいるぞ…

ざわざわ…

まじか！？Fクラスはてつきり男しかいないと思っていたぜ！！ヨ
ッシャアア！！

ウオオオオ！！ナルちゃん、秀吉コンビという心の潤いさえいれ
ばもう何もいらない！！

どこに男しかいないですってええええ！！！？確かに胸は薄いけど
私だって女よ！！！！

でもなんで秋本さんがいるんだ…？

そうだよな、結構頭がいいと聞いているが。

どうやら事故かなにかがあったらしく試験が受けられなかったらしい。

ちょっと無視しないでよ!!!

実は俺試験の日はちょうど頭が悪い日で、テスト受けられなかったんだ。

元々だろう。

やんのかゴリアアア!!??

やってやんよ!!!ミツクミツクにしてやんよ!!

ムキヤアアアアア!!!もう貴方達全員間接逆にしてあげるわ!!!

s i d e F クラス e n d

.
.
.

「バカばかりだな……………」

「まっただ。」

第二話（後書き）

バカテス書いている井上賢二さんの文才に驚いた。

第三話（前書き）

だいぶ文章がましになりましたかね？

第三話

島田がFクラスメンバー（俺、雄二、秀吉を除く）をジェノサイドし終わった頃に、俺の親友、土屋康太が教室に入ってきた。

「……………どういう状況？」

康太が今のFクラスの惨状をみてすこし驚いている。

「バカ共の醜い争いだ。」

雄二が簡単に説明してくれた。

「康太、お前もFクラスか？というかそのバッグはなんだ。エベレストに登る登山家が持ってそうなくらい大きいぞ。」

「……………なんでもない。（言えない。ナルの抱き枕×3と写真集、その他もろもろどっさり入ってるなんて決して言えない。）」

なんでもないなんてことはないだろう。今日授業ないし。部活だつて康太は入ってないんだ。

そんなに荷物を持っている必要性は全く見当たらないぞ。

「まあいい。そろそろチャイムが鳴るから席につこうぜ。席って自由決めていいみたいだな。」

「ワシは廊下側のこの席に座ろうかの、というかもうほとんど埋まっておるのう。」

「じゃあ俺も秀吉の後ろに座るよ。」

席空いてないし話し相手が近いほうがいいからな。

「俺はすでに席は一番後ろにしてある。」

たしかに雄二のカバンらしきものが真ん中の一番後ろに置いてある。どうせ、雄二の事だから授業をサボるために先に席をとっておいたのだろう。だから早い時間から教室にいたのか。

ん？二つ席が空いてるぞ。まだ誰か来てないのかな。まあいいか。康太は雄二の隣の席に着いたようだ。

キンコンカーンコン．．．．．

チャイムがなったか。つまり二人遅刻か。二年になった初めの日にいきなり二人も遅刻か．．．
さすがFクラスというべきか？

というかいつまで教卓にいるつもりだ。雄二。

チャイムがなつてから5　6分たったが未だに担任の教師が来ない。
クラスの設備だけじゃなく先生の質も悪いのか．．．？

ガラガラッ

「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ
」

「早く座れ、このウジ虫野郎。聞こえないのか？ああ？」

教卓にいる雄二が遅れてやってきたバカ。明久にいきなり罵倒した。明久と雄二って友達のはずだがいつも険悪だよな？本当に友達か？鉄人から逃げるときはとんでもないコンビネーションを発揮するが、あれか喧嘩するほど仲がいいってやつか。

「…………雄二なにやってんの？」

明久にしてはまともなことを言った。

「先生が遅れているらしいから、代わりに立ってみた。」

先生はたしかに遅れているが雄二が代わりに立っている理由にはならんし、遅れているからじゃなくて初めっからそこに立っていただろう。

さらりと嘘をつくな。すっかり嘘が板についているようだな。これも鉄人などに言い訳をよく言ってるからだろう。

「先生の代わりって、雄二が？なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな。」

「え？それじゃ雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そつだ。」

ニヤリと口の橋を吊り上げる雄二。

雄二は昔、神童と言われる程、頭が良く勉強の成績もよかった。今は成績こそ酷いが、頭のよさ、回転の速さは今も健在だ。

成績が低いのは単純に勉強してないからだが、昔はしていたらしい。今、勉強してないのは昔とある出来事がきっかけらしいが、詳しい事は雄二から聞いてないので知らない。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

兵隊とすこし不謹慎な言葉ではあるが確かに、今の俺らはそれにぴたり当てはまる。

そう、学園、文月学園に導入されている。

最先端システム——召喚獣システムを使った。試験召喚戦争というものがあり、

クラス間で戦い、勝つと相手の設備を奪い取ることができるというものである。

例えば、FクラスがDクラスに勝つとDクラスとFクラスの教室が入れ替え、つまりFクラスの人がDクラスを使うことができるのだ。

そして負けたDクラスはFクラスの設備を使わなければいけなくなるという、

中々おもしろいルールがあるのだ。

ちなみに格下が…FクラスがDクラスに負けると、Fクラスの設備がさらに落とされるのだ。

（まあFクラスはこれ以上下がろうにも下がらないだろうが）

そしてクラスの代表、雄二が戦争をするかしないか、を決める権限を持っているのだ。

ただし、戦争を申し込まれたら拒否をすることはできない。

……………というか俺達をふんぞり返って見下ろすな。なんかムカつく

「それにしても……………さすがはFクラスだね。」

明久がそんなことをいいながら空いてる席を探して、雄二の斜め右前の席が空いているのを見つけた。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に俺の前から覇気のない声が聞こえてきた。
寝ぐせのついた髪にシワシワのシャツを貧相な体に来た、汚えなさ

そんな風体のおっさんがいた。

「それと席についてもらえますか？HRホームルームを始めますので。」

福原慎先生だった。

本当に質の悪そうな先生が来たな……

「はい、わかりました」

「うーっす」

明久と雄二が席に着きながら返事をした。

先生は明久達を少し待ってから教卓のまえでゆっくりしゃべり始めた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしく願います。」

先生はしっかりチョークの粉を拭き取られていない黒板に名前を書こうとして、

……やめた、チョークすらなかったようだ。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出てください。」

不備しかねえよ。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

とクラスメイトの誰かが先生に不備を申し出る。

「あー、はい。我慢してください。」

.....もう俺は何も言わん。

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています。」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください。」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど。」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請してお

きましよう。」

.....
不幸だ。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください。では自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人から願います。」

福原先生の指名で目の前の秀吉が立ち上がった。

「って俺二番目じゃん。どうしよ、なんて紹介しようかな。」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

—— うん趣味と名前だけでいいか。

そう俺が軽く悩み紹介するためのセリフを考え終わった頃に秀吉の番が終わった。

「—— と。いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい。」

俺の番だな——

「俺は秋本、秋本奈留だ。最近の趣味は運動と歌、ニコニコ動画を見ることがな。今年一年よろしく。」

適当に俺の紹介は終わらせた。

「なんでここにいますか。」

誰かに普通に聞いたら失礼な質問をされた。
つち何回この説明したら済むんだ。

「色々あつて試験が受けなかったんだ。」

Fクラスのやつら イェーイとか喜んでんじゃねえ！！！！ていうかなんで喜んでるんだよ。

お前らを友達として接したこともなければ会話もした覚えがない奴らが大半だぞ。

そんな事を考えていると康太の紹介が聞こえてきた。

「……………土屋康太。」

かなり口数がすくない俺の親友は、小柄だが引き締まった身体をしていて運動神経もいいがかなりのムツツリ野郎である。

しかし女子が一人しかいない。むさ苦しいにも程がある光景だ。

「——です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きは苦手です。」

今度は唯一の女。島田の紹介の番のようだ。

「あ、でも英語は苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は——」

「趣味は吉井を殴る事です」

「

そんなことを言ったり、本当に実行するから女子扱いされないんだよ…

「はろはろー」

島田が明久に笑顔で手を振っている。

さっきのセリフを聞いた後、笑顔で手を振られたらこええよ。

「あう。し、島田さん」

ほら怖がつてんじゃねえか。

「吉井、今年もよろしくね。」

しかし元同じクラスの奴。俺の知り合いが多いな。

……俺の周りがバカばっかってことか？

そんなことを考えているうちに次々に自己紹介が終わってゆき、明久の番になった。

「——コホン。えーっと。吉井明久です。気軽に【ダーリン】と読んでくださいね」

【【【ダァアアアアーリイイイイイイーンンン！！】】】

おげええええ！！！！ 気持ち悪！！
明久なんて特徴「バカ」で十分すぎるっ
あとでぶちのめしてやる！！

明久も自分で言ったくせ気持ち悪がっている…

そのまま紹介が継続されているなか。いきなりドアが開いた。
息を切らせて胸に手をあてている女子生徒。

その容姿は肌は白くきめ細やかで背中まで届く柔らかそうな印象の
ピンクの髪は。

本人のやさしげな性格を表しているように見え、保護よくを書きた
てるような容姿をしている。

姫路瑞希であった。

「あの、遅れて、すいま、せん。」

【えっ？】

クラス全体から驚いたような声が聞こえた。
そんな中先生が姫路に声をかけた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん
もお願いします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします。」

小柄な体をさらに縮こめながら声を上げる姫路。

そしてクラス全員が思っている事を聞く生徒が一人。

「はいっ！質問です！」

「あ、は、はいっ。なんですか？」

登校するなりいきなり声をかけられ驚く姫路、そんな様子がすこし可愛く思える。

「なんでここにいますか？」

さつき俺も同じ、聞き様によつては失礼な質問をされた。

まあ俺は理由を知っているからいいが、大抵の人は知らないだろう。みんなが驚いている理由は、姫路は入学した頃から常にテストの成績順位一桁以内に名前をのこしていることで有名である。

誰もがAクラスにいますと思っていたのだ。

そんな彼女がFクラスにいるのはたしかに驚くに足りえるだろう。

しかし、よかった、もう一人女子が増えて空気が少し澄んだ気がする。

「そ、その……」

緊張した面持ちで姫路が口を開く。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

クラスの皆が「あ、なるほど」と納得し、うなずいていた。

そんな姫路の言い分を聞き、クラスの面々が言い訳の声が上がる。

『そう言えば俺も熱――がでたせいでFクラスに』
ノモンダイ

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、ナルが寝かしてくれなくて』

『ぶちコロスぞ、てめえ!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

『今年一番の大ウソをありがとう』

くそっ！！俺を巻き込むんじゃねえ！！
俺には男色の毛はない！！

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

そんな状況にすこし動揺している姫路が紹介を終わらせ、逃げるように明久の隣、康太の席の前に座った。

「き、緊張しましたあゝ……」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏す姫路。

……………このクラス疲れる。寝よう。

「秀吉、俺は疲れたから寝る。終わったら起こしてくれ。」

「分かったのじゃ、本当はよくないんじゃないが…お主今、顔色悪いからもう。」

そんな秀吉の優しさに心打たれながら、
このクラスの力オスさから現実逃避をするために。俺は卓袱台に突っ伏し寝た。

[illegible]

【大ありじゃああつ！！！！！！！！！！】

ビツクン!!!

「んな！？なんだなんだ！？」

せつかくいい気分で寝ていたのに今の悲痛そうなクラス一同の叫びできつぱり起きてしまった。

「だろっ？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。」

『そうだそうだ!』

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ!改善を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ?あまりに差が大きすぎる!』

雄二はそんなFクラス達の気持ちに満足したのか、不敵に笑みを浮かべて――

「これは代表としての提案だが……」

――FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う。」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

第三話（後書き）

3時間も書くのに時間かかった・・・

第四話（前書き）

五時だ、辻ー！ばんばん報告お願いします！
（誤字脱字）

感想まっています！

第四話

バカテスト／英語

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my
grandfather had used regularly.
」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはT h i s だけです。

吉井明久の答え

「
「
*
X
」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

秋本奈留の答え

「この本棚は私の祖母になっている。」

教師のコメント

一体君に何があったのですか。

[illegible]

Aクラスへの宣戦布告。

正直Fクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけがない。』

『これ以上落とされるなんて嫌だ。』

『姫路さん達がいたら何もいらない。』

……最後に「達」という言葉が聞こえた気がするが気のせいだな。

とにかくそのような悲鳴が教室内のいたるところから上がる。

確かにテストの成績で大方の勝敗が決まってしまうのだ。学年の優等生が集まるAクラスと基本成績が極端に悪い奴らが集まるFクラスとじゃ普通に考えれば勝てるわけがない。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる。」

そんな圧倒的戦力を知りながらも、雄二はそう宣言した。

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な声が響き渡るが、不敵な笑みを浮かべる雄二のその雰囲気にはクラスメイトの何人かは「本当に勝てるのではないか？」と思わ

せられていたようだ。

かくいう俺も勝てるような気がしてきた。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。」

こんな雄二の言葉を受けて教室内が更にざわめく。

「それを今から説明してやる。」

壇上から俺達を見下ろしながらそう言った。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを除いてないで前に来い。」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太。

姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、康太は顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩きだした。

流石だな。あそこまで恥も外聞もなく低姿勢からスカートを覗き込むなんて、康太以外にできる奴はいないんじゃないか。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる聖職者——ムツツリー二だ。」

「……………！！（ブンブン）」

土屋康太という名前はそこまで有名じゃない。だが、ムツツリー二という名前は別だ。

その名は男子生徒には畏怖を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。

『ムツツリー二だと……？』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ……』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

畳の跡を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。たとえどう
いった状況であろうとも、自分の下心は隠し続ける。
異名は伊達じゃない。

「……？？」

姫路は頭に多数の疑問を浮かべているようだ。

恐らくムツツリー二の意味が分からないのではないのかと思う。
純粹っぱいからなあ、姫路は。

「姫路のことを説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ。」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している。」

試召戦争では、彼女ほど頼りになる戦力は中々いないだろう。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった。』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない。』

『ああ、彼女さえいれば何もいらないな。』

このクラスの奴らはいちいち誰かにラブコールを送らなければ気が済まないのか。

「木下秀吉だっている。」

秀吉は学力では有名ではないが、他の事で有名だ。演劇部のホープだとか、双子の姉だとか。

『おお……！』

『ああ。アイツは確か、木下優子の……』

「そして、秋本奈留がいる。」

ん？俺か？ああそりやそうか。すくなくともBクラス程度の実力が俺にはあるからな。

『秋本奈留。アイツは運動神経が良く。その方面でかなりの活躍をしていると聞いている……』

『演劇でも活躍していなかったか？』

『それに勉強の方面ではその気になればAクラスに入れる程の実力の持ち主だ……！』

なんか照れるなあ。

「当然俺も全力を尽くす。」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ。』

『坂本って、小学生の頃は神童って呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか。』

『実力はAクラスレベルが三人もいるって事だよな！』

いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気クラス中に満ちてきた。

そう、気がつけば、クラスの士気が確実に上がっていた。

「それに、吉井明久だっている。」

……シン――

そして一気に下がる。

明久はオチ扱いか。雄二はとことん明久をいじるのが好きだな。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って。』

『聞いたことないぞ。』

「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二達と違って普通の人間なんだから、普通の扱いを――って、なんで

僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

俺もノリで明久を蔑むような目で見る。

「そうか。知らないなら教えてやる。こいつの肩書はく観察処分者だ」

『それってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

クラスの誰かがそんな事を呟いた。

「ち、違っよっ！ちよっとお茶目な16歳につけられる愛称で。」

「そっだ。バカの代名詞だ。」

「肯定するな、バカ雄二！」

観察処分者、学校生活をする上で問題があると判断された生徒に課せられる処分で、明久がそれに該当される……明久が初めての観察処分者だそっだ。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路が小首を傾げている。優等生の姫路には馴染みがない単語らしい。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具

合だ。」

そう、本来召喚獣は物に触る事が出来ない。彼らが触れることができるのはほかの召喚獣だけ。幽霊のようなものだ。だが、明久の召喚獣は特別製で物にさわれるのだ。

「そうなんですか？それって凄いですね。召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですね。」

姫路が明久に羨望の籠った眼差しで見つめている。なんか明久が照れている。

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ。」

『観察処分者ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？』

『だよな。それならおいそれと召喚できないやつが一人いるってことになるよな。』

明久誤魔化していた部分が、あっさりバレた。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ。」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うところだよな？」

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。」

「うわ、すっごい大胆に無視された！」

明久がむず痒そうな顔をしている。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員ペンを執れ！出陣の準備だ！」

『うおおーっ！！』

「お、おー……」

クラスの雰囲気には圧されて姫路さんが小さく拳を作り掲げていた。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

と雄二が明久に命令する。てか大役なら雄二がいきやいいんじゃない？

「下位戦力の宣戦布告の使者はたいてい酷い目に遭うよね？」

なるほど、だから雄二は自分がいやな仕事を明久に任せたのか。

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ行ってみる。」

「本当に？」

明久が疑っているがこいつは散々自分を酷い目にあわせたやつと言葉を信じるのか？

「もちろんだ。俺を誰だと思っている。」

わずかな逡巡すらなく、力強く断言する雄二。
明久はすこし考えた様子を見せる。

「大丈夫、俺を信じる。俺は友人を騙すような真似はしない。」

「分かったよ。それなら使者は僕がやるよ。」

「ああ、頼んだぞ」

クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、明久は宣戦布告をするためじりっけとクラスに向かった。

.....

「騙されたあつ！」

ものすごい勢いで教室に転がり込んできた明久。・・・つちよ・・・大丈夫か？

服破れてるし肌が露出しているところに引っ掻き傷がたくさんあるぞ。

そんな明久を雄二が見下ろしながら呟いた。

「やはりそうきたか」

「やはりつてなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか。」

「少しは悪びれるよ！」

去年の春から雄二と明久との付き合いがあるが、未だにこいつらの関係がわからない。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「明久、傷から血が垂れているぞ。治療したほうがいいんじゃないか？」

俺と姫路が心配して明久に声を掛ける。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷。血はすぐ止まると思うよ。」

「吉井、本当に大丈夫？」

島田も心配のようで、声をかけている。

「平気だよ。心配してくれてありがとう。」

「そう、よかった……。ウチが殴る余地がまだあるんだ……」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

慌てて腕を押さえて転がり回る明久。島田はとんだ鬼畜だな…

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ。」

他の所で話し合いをするようで、雄二は扉を開けて外へ出て行った。というか雄二、もう少し友達には優しさを見せてやれよ。

「あの、痛かったら言って下さいね？」

「大変じゃったの」

そう告げて姫路と秀吉は雄二の後を追った。

島田は特になにも言わずについて行っていた。

「……………（サスサス）」

自分の頬をさすりながらムツツリーニが続こうとしたが明久の一言で止まる。

「ムツツリーニ。覗いてた時の畳の跡ならもう消えてるよ？」

「……………！！（ブンブン）」

「いや、今更否定されても、ムツツリーニがHなのは知ってるから。」

「……………！！（ブンブン）」

「ここまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いなと思う。」

「……………！！（ブンブン）」

「……………何色だった？」

「みずいろ」

即答だった。

「やっぱりムツツリーニは色々な意味ですごいよ。」

「……………！！（ブンブン）」

二人が馬鹿なやり取りをしている間、なんとなく下をみてみると妙に白い畳を見つけた。

「それにしてもこの教室の畳、カビの臭いがすごいよな。畳の色が白ばんでいるぞ。ていうか畳って白ばむ物だったっけ？」

そう俺は言いながらなんとなく、畳を捲りあげてみると……………

そこにはく腐海>があつた。

「ひいあああああつっ!???」

あまりの気色の悪さに悲鳴を上げて、つい、隣にいた明久に抱きついてしまった。

ガクガクブルブル

「っな、ナル!??どうしたのさ急にノノノ」

「つつ...!?わ、悪い!.....置の裏を見たら分かる.....」

人に抱きついた事に俺は顔を赤くしながら離れ、少し落ち着くのを待ってそう告げた。

「畳の裏……？……ひいああああっ！……？？」

明久が怪訝そうに畳を捲りあげ裏を見てから俺と同じような叫び声をあげて隣にいた康太に抱きついた。

「……………っ（ゾクッ）」

バキッドゴッ

康太は明久に抱かれたのに嫌悪を抱いたのか、明久の顔面と腹にワンツーパーチを繰り返した！

「ッガ！？ゲフッ！？」

明久が顔と腹を押さえながら座り込んだ。

「っちょ……悪かったけど、何も、殴る事は、なかった……んじゃ……」

「反射。」

苦しそうに抗議する明久に、しれっと言い返す康太。

「……は、早く雄二の後を追おうぜっ！」

つく……！まさか明久に抱きついてしまうなんて一生の不覚……！！

俺は先ほどの光景からの現実逃避を含め雄二達の後を追うために走り出そうとしたが、

「明久達、何やっているの？遅いわよ？」

中々こない俺たちを島田が様子を見に来たようだ。

まだ痛みが引かないのか少し青い顔をした明久が返事をした。

「ごめん。今行くよ。」

「全く…一度、D a s B r e c h e n ——— ええと、日本語だと……」

D a s B r e …… なんだって？

「……………調教。」

ムツツリーニが島田に教えてあげた。てか調教って……

「そう。調教の必要がありそうね。」

「せめて教育とか指導と言ってくれない？」

明久がさらに青い顔をしながら修正を頼んだ。

「じゃあ中間として Z j i c h t i g u n g ———」

「それは分からない。」

「確か日本だと折檻だったかな？」

「それ悪化してるよね？」

「そう?」

「というかムッツリーニ。どうして調教なんてドイツ語を知っているの？」

「……一般教養。」

いやな教養だな。

「相変わらずムツツリーニは性に関する知識だけはズバぬけてるね。」

「康太は中学校の頃からこんな感じだったぞ。」

「ブンブン」……「」

なんて馬鹿な事を話しながら島田の後について行った。

[illegible]

「遅かったじゃないか。」

「ごめん、俺のせいだ……うえっ……」

あの腐海を思い出して気持ち悪くなってきた。

「何があつたかは聞かないでおく。」

雄二が優しい。明久にもその優しさを分けてやれよ。

「ところで明久、すっかり宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど。」

俺らもそれにならって各々腰を下ろした。

「それじゃ、先にご飯でことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べるよ？」

「そう思つたらパンでもおごってくれと嬉しいんだけど。」

お前また弁当がないのか？

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

姫路が驚いたように明久を見る。恐らく姫路は規則正しい生活を送っているんだろうな。

「いや。一応食べているよ。」

「……………あれは食べていると言えるのか？」

雄二が横槍を入れた。

「何が言いたいのか。」

「いやお前の主食って——水と塩だろう？」

雄二が憐れむような声で明久に告げた。

すると明久がいかにも失礼な！といった感じに反論した。

「きちんと砂糖だつて食べているさ！」

「あの、吉井君。水と砂糖つて、食べるとは言いませんよ……………」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな。」

「お前はそれで満足なのか？」

俺を含め皆優しい目で明久を見る。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな。」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

雄二の的確な指摘に明久が言い訳をする。

明久の両親は仕事の都合で海外にいる為、一人暮らしをしている。当然生活費はすこし多いくらい貰っているのだが。遊び人の明久には少々足りないようだ。

「全く、ときどき俺が弁当作ってやってるんだからもう少し余裕があってもいいんじゃないか？明久。」

「えっ、秋本さんは吉井君に弁当を作ってあげているんですか？」

何故か姫路がすこし焦り気味に俺に質問してきた。

「まあな、……こいつ、去年餓死しかけてな——もちろん自分のせいだが。流石に見かねて俺が一回作ってやったんだが、それがなぜか今も続いている。」

よくこいつ塩とかだけで生きていたな。

「そうなんですか……あの、良かったら私がお弁当を作ってきますようか？」

「え？」

「明久なんか間違っているぞ。良く分からないけどなんか違う。」

明久が突然の優しい言葉に目をまん丸にして驚いていた。

後、なにが違うかわからんが何か違った気がするのでつつこんでしまった。

「本当にいいの？僕、塩と砂糖——ナルの弁当以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

俺の弁当（週2〜4程度）だけって事は朝夜は毎回、塩と水、砂糖で我慢していたのか。
本当によく生きているな。

「はい。明日のお昼でよければ」

「良かったじゃないか明久。」

「うん！」

雄二がからかっているのだが明久は姫路も手作り弁当ということでそれすら心地がいいと言わんばかりの笑みを浮かべている。

「……ふーん。瑞希つてずいぶん優しいんだね。吉井」だけ」に作ってくるなんて。」

島田が不機嫌そうにして、棘のある言葉を姫路に言い放った。

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

雄二が聞き返した。

「はい、嫌じゃなかったら」

姫路はやさしいな。俺達のみで作ってくれるのか。
明久がどこもなく不満げではある。

「それは楽しみじゃのう。」

「どんな料理なんだろうな？」

「……………（コクコク）」

「……………お手並み拝見ね。」

姫路さんのも含めると7人分。作るの大変そうだな？てか7つも弁当箱あるのか？

「分かりました。それじゃ、皆さんに作ってきますね。」

何一つ嫌な顔をしない彼女。

「姫路さんて優しいね……………今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き——」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ。」

「——にしたいと思っていました。」

なんか明久が乗り切った！みたいな清々しい顔をしている。どれだ
けめでたいんだ。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ。」

「明久。お前はたまには俺の想像を超えた人間になる時があるな。」

「明久。初めて会う前から——ってお前に何があった。」

ツツコミどころが多すぎるぞ明久。

「だってお弁当が……」

「さて話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう。」

おお。すっかり忘れてたぜ。

「雄二。一つ気になってたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？
段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラ
スじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね。」

「まあな、当然考えがあつてのことだ。」

雄二が鷹揚にうなづく。

「どんな考えですか？」

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな。」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

明久の言うとおり成績でクラスは分けられているので、Eクラスは当然俺らFクラスより試験の点数が良い。

だから単純に考えたら明久の疑問はもつともなのだが……

「ま、振り分け試験の時点では向こうが強かったかもしれないな。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみる。」

「えーっと……」

明久がこの場にいるメンバーを見渡し、ふむふむと頷く。

「美少女三人と馬鹿が二人とムツツリが一人いるね。」

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!?! 雄二が美少女に反応するの!?!」

「……………(ツポ)」

「ノノノノノノ(プイッ)」

「ムツツリーニまで!?! ナルはかわいいからいいけど、どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない!」

……………ノリで便乗して俺が男として見られているか確かめたら肯定された……………

OTL

「まあまあ・落ち着くのじゃ。代表にムツツリーニ。ナルも落ち込むでない。」

「そ、そうだな」

「いや、まず美少女で取り乱すことに対してツッコミを入れたいんだけど。」

「まあ、要するにだ」

コホン、と咳払いして雄二が明久を無視して説明を再開する。

「姫路とナルに問題ない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味がないということだ。」

「？それならDクラスとは正面からぶつかるど厳しいの？」

「ああ。確實とは言えないな。」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ。」

たしかに明久のいうことに一理ある、元々Aクラスを倒すのが目標だからな。

しかし、明久は人の話を聞いてないな。大雑把にだが、さっき教室で話していただろう。

「初陣だからな。派手にやって景気づけにしたいだろ？それにさっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな。」

「あ、あの！」

姫路にしては大きな声だな。

「ん？どうした姫路」

「えっと、そのさつき言いかけた、って……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、それか。それはついさつき、姫路の為にって明久に相談されて——」

「それはそうと！」

誤魔化せてないぞ明久。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ。」

「負けるわけないさ」

雄二が明久の心配を笑い飛ばす。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。」

——
いいか、お前らのウチのクラスは——
は最強だ。」

不思議な感覚だった。

根拠のない言葉でありながら、何故かその気になってくる。
雄二の言葉にはそんな力があつた。

「いいわね。面白そうじゃない。」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの。」

「……………（グッ）」

「が、頑張りますっ」

「全力で、協力してやるよ。（あんな畳の下が腐海の教室なんて御免だ！！！！）」

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう。」

そんな俺達の返事に気を良くした雄二が説明を始め、
涼しい風がそよぐ屋上で、俺達は勝利の為の作戦に耳を傾けた。

……………

side 明久 / ミーティングを始める前

——全く雄二は平気で嘘をつく。本当に僕の友達なのか。週に七回は疑うよ。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「明久、傷から血が垂れているぞ。治療したほうがいいんじゃないか？」

僕の有様を見て、姫路とナルが駆け寄ってくれる。
ああ、なんて優しいんだろう。

ここは男として余計な心配をかけないようにしないと。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷。血はすぐ止まると思うよ。」

「吉井、本当に大丈夫？」

島田さんまで来てくれた。身体は痛いけど、こうやって心配されるのも悪くないね。

「平気だよ。心配してくれてありがとう。」

「そう、よかった……。ウチが殴る余地がまだあるんだ……」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

慌てて腕を押さえて転げ回る。島田美波、本当に油断ならない女だ。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ。」

他の所で話し合いをするようで、雄二は扉を開けて外へ出て行った。というか雄二、僕たち友達だね？優しさを少しは見せてくれてもいいんじゃない？

「あの、痛かったら言って下さいね？」

「大変じゃったの」

そう告げて姫路さんと秀吉は雄二の後を追った。
島田さんは特になにも言わずについて行っていた。

「……………（サスサス）」

自分の頬をさすりながらムツツリーニが続こうとしたが僕は指摘をしてあげた。

「ムツツリーニ。覗いてた時の畳の跡ならもう消えてるよ？」

「……………！！（ブンブン）」

「いや、今更否定されても、ムツツリーニがHなのは知ってるから。」

「……………！！（ブンブン）」

「ここまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いのと思

う。」

「……………！（ブンブン）」

「——何色だった？」

「みずいろ」

即答だった。

「やっぱりムツツリーニは色々な意味ですごいよ。」

「……………！（ブンブン）」

「それにしてもこの教室の畳、カビの臭いがすごいよな。畳の色が白ばんでいるぞ。ていうか畳って白ばむ物だったっけ？」

…………… ああ、にしてもナル、君はなんて可愛いんだろう。いつ見ても本当に男なのかと疑ってしまう。

そんなナルが畳を捲りあげているのを横目で見ています。

「ひいあああああっ！……？？」

可愛い悲鳴をあげて僕に抱きついてきた……っえ？

ああ、いい臭いとナルの柔らかい身体が……！しかも若干涙目で震えている……

がっはああああ！？

耐えろ！僕の理性！！

「っな、ナル！？どうしたのさ急に／＼／」

「つつ……！？わ、悪い！………置の裏を見たら分かる………」

そうナルが動揺しながら離れ答える。

あ……もうちょっと堪能していたかった。

にしても流石僕、あのナルが保護欲をそそる小動物のように怯えているのだ。

いつもの若干不機嫌そうにしているナルとのギャップの差が激しいせいで余計に萌えてしまった。

あの状態のナルを見て襲わない事ができるなんて世界中どこを探しても僕以外いないだろう。

しかしナルは何を見て驚いたんだ？

確かめる為に僕も置を捲りあげてみた。

「置の裏……？………ひいあああああつつ！……？？」

キモ……！なんかネバァーってしてる……！ネバァーって！

僕は畳の裏を見てからナルと同じような叫び声をあげて隣にいたムツリーニに抱きついてしまった。

「……………っ（ゾクッ）」

バキッドゴッ

ムツリーニは男の僕に抱かれたのに嫌悪を抱いたのか、僕の顔面と腹にワンツーパーンチを繰り返された！

「ッガ！？ゲフッ！？」

「っちょ…………悪かったけど、何も、殴る事は、なかった…んじゃ…」

「反射。」

苦しみながら抗議する僕に、しれっと言り返すムツリーニがいた。

……………

ミーティング中

「明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べるよ？」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど。」

僕は気持以外でもありがたく頂くのに。

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

姫路さんが驚いたようにこちらを見る。きっと姫路さんは規則正しい生活をしているんだろうな。いろいろと発育もよさそうだし。

「いや。一応食べているよ。」

「……………あれは食べていると言えるのか？」

雄二の横槍が入る。

「何が言いたいのさ。」

「いやお前の主食って——水と塩だろう？」

雄二の憐れむような声。

失礼な！僕をバカにするにも程がある！

「きちんと砂糖だつて食べているさ！」

「あの、吉井君。水と砂糖って、食べるとは言いませんよ……………」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな。」

「お前はそれで満足なのか？」

皆の妙に優しい目が逆に辛い。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな。」

「し、仕送りが少ないんだよ!」

僕の両親は仕事の都合で海外にいる為、一人暮らしをしている。生活費は貰っているのだが。

……趣味ってお金かかるよね。

「全く、ときどき俺が弁当作ってやってるんだからもう少し余裕があってもいいんじゃないか? 明久。」

ナルが弁当を作ってくれなかったらきつと去年の夏ごろにはミイラだったよ。

ナルって少し辛口ではあるものの、根が優しいよね。嫁にしたい。

「えっ、秋本さんは吉井君に弁当を作ってあげているんですか?」

何故か姫路さんがすこし焦り気味にナルに質問してきた。

「まあな、こいつ、去年餓死しかけてな——もちろん自分のせいだが。流石に見かねて俺が一回作ってやったんだが、それがなぜか今も続いている。」

本当にあの時は助かった。

「そうなんですか?……あの、良かったら私がお弁当を作ってきますか?」

「え？」

「明久なんか間違っているぞ。良く分からないけどなんか違う。」

突然の優しい言葉に僕は耳を疑った。

「本当にいいの？僕、塩と砂糖——ナルの弁当以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお昼でよければ」

「良かったじゃないか明久。」

「うん！」

ここは素直に喜ぼう。雄二のからかう台詞だって心地いい

「……ふーん。瑞希ってずいぶん優しいんだね。吉井」だけ」に作ってくるなんて。」

島田さんが不機嫌そうにして、棘のある言葉を姫路さんに言い放った。

「やっぱりやめます」なんて言われたらどうしてくれるんだ！

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

「はい、嫌じゃなかったら」

姫路さんはいい子だなあ。雄二達まで作ってあげるなんて。僕だけじゃないのが残念だけど。

「それは楽しみじゃのう」

「どんな料理なんだろうな？」

「……………（コクコク）」

「……………お手並み拝見ね」

姫路さんのも含めると7人分。作るのが大変そうだ。

「分かりました。それじゃ、皆さんに作ってきますね。」

何一つ嫌な顔をしない彼女。

僕には考えることすらできない行為だ。なんて献身的で、魅力的な人なんだろう。

「姫路さんて優しいね……………今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き——」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ。」

「——にしたいと思っていました。」

つぶ——さすが僕の判断力。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ。」

恨むぞ僕の判断力。

「明久。お前はたまには俺の想像を超えた人間になる時があるな。」

「明久。初めて会う前から——ってお前に何があった。」

「だってお弁当が……」

これも生きる為の行動。すべて貧乏が悪いんだ!!

side u o t 明久

第四話（後書き）

つかれた5時間かった。

腐海は 風の谷のナウシカを思い出していただければいいかと

第五話（前書き）

前書き ついに、戦争がはじまります。

…… ラノベを読むのに1時間ちよいしかかからないのに。

P10 20分かくだけで3時間は軽く使っちゃってどついつと。

明日三者面談。死ねます。

今回のバカテストはオリジナルです

第五話

バカテスト／クイズ

HRの時間が余り、何もしないのもあれですので、即席のクイズを皆さんにやって貰います。

三匹の子豚達に名前を付けたのはなんとなんです。

【クイズ】

この問題はとある物語から抜粋しました。

『母さん豚は三匹の学君と悟君と昭君という名前の子豚たちを自活させるために、外の世界に送り出しました。』

学君はわらで家を建てました。

悟君は木の枝で家を建てました。

昭君はレンガで家を建てました。

しかし、ある日、大きな悪いオオカミがやってきました。

さて、一体この話はどうなるのでしょうか。』

姫路瑞希の答え

『最初に狼が学君のわらの家を吹き飛ばし、子豚を食べてしまいま

す。

二番目に悟君は木の枝で家を建てるが、やはり狼との同様のやり取りの末に、学君と同じ運命を辿ります。

三番目の昭君はレンガで家を建てます。

狼はいくらの息を吹き付けても、レンガの家を吹き飛ばすことはできませんでした。狼は昭君を家の外におびき出そうとたくらみますが、失敗に終わります。

最後に狼は煙突から忍び込もうとしますが、昭君が用意した煮えたぎる鍋一杯の熱湯に飛び込んでしまい。釜茹でにされ死んだ狼を昭君は料理すると、そのまま食べてしまいました。』

教師のコメント

その通りです。

鍋に飛び込む出来事を知らない人たちが多いのですが、姫路さんは知っていましたね。

吉井明久の答え

『狼が子豚達を食べてまん丸太ったあと、僕が食べる。』

教師コメント

直接豚達を食べればいいじゃないですか。

秋本奈留の答え

『学んで、悟って、諦める。』

教師コメント

学んで 悟って 諦める
<まなぶ><さとる><あきら>

誰がうまいことを言えと。

side 明久

「吉井！木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らしながら駆けてきたのは同じ部隊に配属された

島田さん。こうして改めてみると、背は高くても綺麗なのに、どこか女性としての魅力に欠ける。一体何が足りないんだろう。

「ああ、胸か。」

「アンタの指を折るわ。小指から順に、綺麗に。」

マズい。何かのスイッチに触れたっぽい。

「そ、それよりホラ、試召戦争に集中しないと！」

今現在前線にいるのは秀吉率いる先行部隊で、そことFクラスの間辺りに僕がいる中堅部隊が配置されている。引き受けた覚えもないけど、部隊長になっている以上は僕には部隊のみんなを導く義務がある。

ここは気を引き締めていこう。

まずは戦場の雰囲気を感じよう。耳を澄ませて、前線部隊の戦闘様子を聞き取るんだ。

『さあ来い！負け犬が！』

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな。』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐えきれない！』

『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう。』

『お、鬼だ！誰か、助けっ——イヤァァ——（ボタン、ガチャ）』

よし試召戦争の雰囲気は大体わかった。

「島田さん、中堅部隊全員に通達。」

「ん、なに？作戦？何て伝えんの？」

ここで僕が出すべき指示はただ一つ。

「総員退避、と。」

「この意気地なし！」

殴られた。しかもチョキで。

「目が、目があっ！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！アンタは部隊長でしょう！臆病風に吹かれてどうするのよ！」

その覚ますべき目に激痛が！そういった台詞はせめてグーかパーで殴った後に言っただけいい！

「いい、吉井？ウチらの役割は木下の前線部隊の援護でしょう？アイツらが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチらがその前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げだしたりしたらアイツらは補給できないじゃない。」

島田さんがヤケにもっともらしい事を言う。

確かに彼女の言うとおりかもしれない。僕らの役割は決して軽いものじゃない。働き次第ではこの戦争を大きく左右してしまうだろう。それなのに、僕は戦死ペナルティの補習が怖くて逃げようだなんて……！

島田さん君はなんて男らしいんだ！何故だか涙が止まらないよ！（あと激痛も）

「ごめん。僕が間違っていたよ。補習室を恐れずにこの戦闘に勝利することだけを考えよう。」

「ええ。それに。そこまで心配することもないわ。個別戦闘は弱いかもしれないけど、これは戦争なんだから多対一で戦えばいいのよ。」

その通りだ。点数じゃ負けているけど、それだけで試召戦争の勝敗が決まるわけじゃない。

やり方次第では勝てる可能性は十分にあるはずだ。

「そうだね。よし、やるぞ！」

「うん。その意気よ、吉井！」

拳を挙げる僕たち。大丈夫、僕らならやれる！と意気込んでいると島田さんのところに報告係がやってきた。

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ。」

さつきと言っていることが全然違う！

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

大いに問題ありのような気もするけどきつと気のせいだろう。

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた。」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ。」

くるりとFクラスに向かって方向転換。

すると、振り返った先には本陣（Fクラス）に配置されているはずのクラスメイト、横田君がいた。

「ん？横田じゃない。どうしたの？」

「代表より伝令があります。」

メモを見ながら横田君がハキハキとした声で告げる。

「『逃げたらクロス』」

「全員突撃しろーっ！」

気が付いたら戦場に向かって全力ダッシュをしていた。それもこれ

で状況を聞きのんびりしながら過ごしている。

「あ、あの。私は戦争に出なくてもいいのですか？」

「ああ、構わない。姫路は切り札で今回の戦争に出すつもりはない。」

「雄二。俺はどうするんだ？今の状況を見ている限り善戦こそしているものの、いまひとつ押しがたりないと思うんだけど。」

「ああ、最後の最後にナルを出すつもりだ。お前ならDクラスくらいなら楽勝だろう。」

まあ、確かに勝てるがなんか自分がサボっている気がして罪悪感がある。

とりあえずやる事がないので、盗聴器の音声を聞く事に集中しよう。

『よし。島田さん、ここは君に任せて僕は先を急ぐよ！』

明久がいきなり外道っぽい事を言っていた。

『ちよっ……！普通逆じゃない！？「ここは僕に任せて先を急げ！」じゃないの！？』

『そんな台詞、現実世界じゃ通用しない！』

『よ、吉井！このゲス野郎！』

『お姉さま！逃がしません！』

『くっ、美春！やるしかないってことね……！』

……いつでも愉快的奴らだなあ……

『サモン！！』

どうやら戦闘に入ったようだ。

『お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました……』

『ちょっと！いい加減ウチのことは諦めてよ！』

『ところで島田さん、お姉さまって——』

『嫌です！お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！』

『来ないで！私は普通に男が好きなの！』

『嘘です！お姉さまは美春の事を愛しているはずですよ！』

『この分からずや！』

「頭が痛くなってきた。あいつら戦闘じゃなくて痴話喧嘩してるぞ……」

「いつもの事だ。」

いつもののか……俺はすこし疲れたので卓袱台に腰掛けて窓の外を見てぼうつとすることにした。

「諦め——んから！このまま無事に卒業できるなんて思わないでくださいね！！！！！！」

美春とやらの断末魔がどこからか聞こえてきた。

こええよ…………

それから40分程経った。

今の状況は前線を吉井達中堅部隊が全力で守っているが、さすがに劣勢のようだ。援軍を送ってやりたいとこだが、作戦につき込む戦力が足りなくなってしまうので送る事が出来ない。

そして俺達は長期戦に持ち込むためおとりした初老の男性で採点の甘さに定評があり、代わりに採点が遅い田中先生を呼んだ。対してDクラスは対照的に厳しいが採点の速さが群を抜いている木内先生を呼んだようだ。

俺達の作戦を読んだのか短期戦に持ち込むつもりの方である。

「もう少し——待って——船越——生を呼んでいる！」

数学の船越先生かな？

まずいな。恐らく相手は採点目的じゃなく立会人になって貰う為だろう。これ以上戦線を拡大されると実力差がはつきり出てしまう。

「船越先生を相手は呼んだようだな……そういえばあの先生婚期（

45歳 / ・独身）を逃して、生徒達に単位を盾に交際を迫っているとか聞いたな。関係ない話だが。」

「ほう。そういえばそんな話もあったな……！、ツクツクツク、いい作戦を思いついたぜ。」

「ん？どんな作戦だ？」

雄二が良い作戦という程だ。よほど効果があるんだろう。

たまたま教室に寄っていた須川を呼び、紙に何か書き込み渡す雄二。須川がその内容を見て腹筋を捻じらせていた。

おい、気になるじゃないか。

「待ってれば分かる。」

廊下にでている須川の後姿を見つめながらゾツとするほどニヤけている雄二がそう言った。

少し時間経ったら放送の合図が鳴った。なんだ？

ピンポンパンポン<連絡いたします。>

聞き覚えのある声で放送室が鳴り出した——須川じゃないか、一体何をするんだ。

<船越先生、船越先生>

<吉井明久が体育館裏で生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。>

……………明久、俺は君の事を一生忘れないよ。

「お、おい……雄二いくらなんでもこれは……」

「ハッハッハ、問題ない。明久の事だ。どうせ、なんだかんだいつて乗り切るだろう。」

「酷い信用の仕方だな……………」

今度豪華な弁当でも作ってやろうかな。明久が不憫すぎる。

『吉井隊長……アンタあ男だよ!』

『ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて!』

『おい聞いたか今の放送』

『ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちに来てるぞ。』

『あんなに確固たる意志を持っている奴らに勝てるのか……?』

『皆、吉井隊長の死を無駄にするな!』

『絶対に勝つぞーっ!』

『……………』

『…………隊長？』

『…………す』

『す？』

『須川あああああつっ！！！！』

士気がめちゃくちゃ上がったFクラスの雄たけび声とFクラスの玉砕覚悟の行為に弱音を吐くDクラスの面々。
明久の叫び声が盗聴器から聞こえた。

「…………まさか雄二ここまで考えていたのか？」

「…………さすがにここまでは考えてない。」

さすがの雄二も士気が上がって相手のが下がるとまでは思っていなかったようだ。

「さて、そろそろ明久達の援護に行ってくる。」

「りょーかい。」

俺、姫路を除いた本陣にいる面子全員で援護にでた。

状況が気になるのでまた盗聴器を聞くのに集中する。

『ああっ！霧島さんのスカートが捲れているっ！』

『なにいつ！？』

明久が雄二達と合流するために時間を稼いでいるみたいだ。

この学校って実はFクラスに限らず皆馬鹿なんじゃないのだろうか。

ガシャアアン！

窓が割れたような音が聞こえた。

『な、なんだ！？なにごとだ！？』

『うわっ！島田さん！そんな物をどうする気だよ！』

島田に罪をなすりつけるなよ。

プシャアアッ！

何かが噴き出す音。

『う、うわっ！なんだ！？』

『ぺっぺっ！こりゃ消火器の粉じゃねえか！』

『前が見えない！』

『島田さん君はなんてことを！』

『Fクラスの島田め！なんて卑怯な奴なんだ！』

『許せねえ！彼女にいたくないランキングに載せてやるからな！』

『そつだ！在学中に彼氏の出来ない状態にしてやる！』

『・・・でも、男らしくてステキ……。お姉さま……。』

明久にあげる予定の弁当の中身をこんにやくだけに変えてやることにした。
ついでにダイエットコーラ。

『だあああつ！』

シュワァァァ

恐らくスプリンクラーだろう音が聞こえてくる。
消火器の粉でも落とすために作動したのか？

『くっ！此処は退くぞ！全員遅れるな！』

Dクラスの隊長らしき人の声が聞こえた。
どうやら撤退するようだな。

『深追いはするな。俺達も明久の部隊を回収したら一旦もどるぞ。』
雄二達が合流したから相手が逃げたのか。

『さて、無事なようだな。明久。』

『うん、まあね』

そうして荒れに荒れた戦闘は一時停戦した。

.

明久達がFクラスに戻ってきた。

「明久、よくやった。」

雄二がらしくもない言葉を口にした。明久を素直に褒めるなんて、
どという風の吹き回しだ？

疑問に思い雄二の顔を見してみる。
果てしなく晴れやかな笑顔だった。むかつくくらいに。

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バッチリな。」

雄二。お前ドSだな。

「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

「明久。両手に持つてる包丁とすんごい重そうな靴下はなんなんだ。」

「やれる、僕なら殺れる……！」

「殺るなつての。」

明久が壊れている。目に光がないぞ。

「ちなみに、だが――あの放送を指示したのは俺だ。」

「シャアアアッ……！」

明久が鋭く踏み込みコンパクトに包丁を避けにくく致命傷になりやすい肝臓に向けて突き出しながら、右手に持っている鈍器（靴下に砂かなにかを詰めているようだ。）を死角となる雄二の頭に振りかぶり……

つておい！？

「ちょ、ちょっと待て明久。落ちつけ！」

「放してっ！ナル！僕は雄二を殺さないといけないんだ！」

「駄目だ！今雄二がいなくなったら戦争はどうするんだ！殺るならAクラスを倒してからにしろ！」

「おい、ナル。さりげなく俺を殺す許可を与えるな。」

雄二に襲いかかる明久を後ろから羽交い締めにして止めて説得を試

みる。

「……………分かったよ。ナルに免じてこの場は許してあげる。」

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるかな」

「無視をするんじゃない——放して！ナル！今度こそ雄二を殺さなきゃいけないんだ！」

「気持ちは痛いほど分かるが、今だけは駄目だ！」

「おっしや！Dクラス代表の首を取りに行くぞ！」

『おっつ！』

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、
頃合いじやろう。」

「……………（コクコク）」

雄二もいちいち明久の神経を逆なでするような事はしないで欲しい。
明久も毎回やり返そうとするなよ。
明久が落ちついてきたので放してやった。

「雄二め…絶対戦争が終わったら靴下を口がさけるまで詰め込みまくってやる。」

「グロいからやめてくれ。想像しちゃったじゃないか。とりあえず

俺達も行くぞ。」

「分かったよ。」

そして俺たちは遅れて廊下に出る。下校中に生徒に混じって戦闘を行っている両軍を見つけた。

「下校している連中にうまく溶け込め！取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

雄二のはっきりした声が響き渡る。

「そっちから回り込め！俺はコイツに数学勝負を申し込む！」

「なら俺は古典勝負を——」

「日本史で——」

俺のクラスの皆がDクラスの連中を取り囲んでいる姿がそこら中に見とれる。

下校中のドサクサに紛れて敵に近づき、取り囲んで打ち取るというすこしずるい作戦だ。

『Dクラス塚本、打ち取ったり！』

一際おおきな声上がる。敵の部隊長をうまく討ち取ったようだ。各クラスのHRも終わって、先生たちを捕まえやすくなったおかげもあってこの作戦はうまくいっている。

「援軍にきたぞ！もう大丈夫だ！皆落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

あれはDクラス代表の平賀か。

「Dクラスの本隊だ！ついに動き出したぞ！」

ウチのクラスの誰かの声が聞こえる。これでこの廊下には双方に主戦力が集っていることになる。

「本体の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りにいけ！他のメンバーは囲まれている奴を助けるんだ！」

『おおー！』

平賀の号令の下、あつというまに雄二の周りがDクラスメンバーで囲まれる。

雄二も周りに本体がいるからそうそうやられはしないだろう。

「Fクラスは全員一度撤退しろ！人込みに紛れて攪乱するんだ！」

相変わらずよく聞こえる雄二の声。

確かに状況はよくない一度退くべきだろう。しかしその命令は作戦の合図が混ざってあるカモフラージュだ。

「逃がすな！個人同士の戦いになれば負けはない！追いつめて討ち取るんだ！」

個々の実力に勝るDクラスだからこそ取れる作戦。

見れば本体の人たちも分散し、追討にかかっているみたいだ。その分、平賀の防備が薄くなっているが、平賀はDクラス代表。つまり

もつとも点数が高かった人。Fクラス相手なら取り囲まれない限り負けはない。この戦力が分散した状況でその判断は正しいと言えるだろう。

俺がいなければな。

「チャンスっ！向井先生！Fクラス吉井が――」

明久が正面から平賀の首を獲りに行ったが近衛部隊に阻まれた。

「Dクラス玉野美紀、サモン」

「なっ！近衛部隊！？」

「残念だったな、船越先生の彼氏クン？」

勝ち誇った顔の平賀。

「ち、違うアレは雄二が勝手に」

「そんなに照れなくてもいいじゃないか。さ、玉野さん。彼に祝福を。」

「分かりました。」

玉野は既に古典の点数で武装した召喚獣を呼びだしている。

「ちくしょう！あと一步でDクラスを僕の手で落とせるのに！」

「何を言つかと思えば、彼氏クン。いくら防御が薄く見えてもさすがにFクラスの人が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう？ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど。」

平賀がフンツと鳴らして明久を一瞥した。

明久がムツとしてから対抗して、片目をつむって応えた。

「それは同感。確かに僕では無理だろうね。だから――」
もったいぶって一息入れて

「ナル、よろしくね？」

「は？」

平賀からナル？誰の事だ？何をいつているんだ？といった感じの聲がする。

俺は下校中の奴らに混じる為にカバンを持っていたためFクラスと思われることなく、簡単に平賀の後ろに立ちまわれた。

そして俺は平賀の肩を後ろからトントンと叩いてあげる。

「やあ。」

「え？や、やあ、どうしたの？秋本、AクラスやBクラスはこの廊下を通らなかったと思うけど。」

未だ現状を認識できていない平賀。

「いや、そうじゃないさ。―― Fクラス、秋本奈留。Dクラス
平賀に現代国語勝負を申し込む。」

「…はあ、どうも。」

「サモン！」

『Fクラス 秋本奈留 現代国語 212点』

VS

『Dクラス 平賀源二 現代国語 129点』

「え？あ、あれ？」

戸惑うながらも平賀も召喚獣を構えさせ、相対する。俺の召喚獣の武器はハルバード。所謂、斧槍だ。殺傷能力が高いんだよねこれ。

ていうか召喚獣の武器によっても強さ変わるんだよね。同じ点数として木の棒と鉄の剣とじゃ倍ぐらい与えられる威力が違うし。

その武器のランク決めは入学してから最初の試験の時の点数で決められているらしい。

「悪いな。俺たちも必死なんだよ。」

そういつて相手の反撃も許さず、召喚獣の頭を跳ね飛ばし、この戦いの決着となった。

第五話（後書き）

後書き その武器のランク決めは入学してから最初の試験の時の点数で決められているらしい。

は才子設定です。

第六話

バカテスト／物理

【第四問】

問 以下の問いに答えなさい。

『(1) $4\sin X + 3\cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのはどれか、 $?$ $?$ $?$ の中から選びなさい。

$\begin{array}{lll} ? \sin A + \cos B & ? \sin A - \cos B & ? \sin A \cos B + \cos A \sin B \end{array}$

姫路瑞希・秋本奈留の答え

『(1) $X = \pi/6$ (2) $?$ 』

教師のコメント

そうですね角度を『 $\pi/6$ 』ではなく『 $\pi/6$ 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) X〃およそ?』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちも分かりますが、これでは回答に近くても点数をあげれません。

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

木下秀吉の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

もう一人いましたね。

.

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ!』

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ! 本当にDクラスに勝てるなんだ!」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな!」

「ああ。アレはDクラスの物になるからな。」

「坂本雄二サマサマだな!」

「やつぱりアイツは凄い奴だったんだな!」

「坂本万歳!」

「ナルちゃん愛してます!」

代表である雄二を褒めたたえる声があったところから聞こえてきた。さっきまで雄二がいた方を見ると、がっくりと頂垂れているDクラ

ス生徒たちの奥でFクラスの皆に囲まれている姿があった。

ラブコール？聞こえませんか。（諦めた。）

「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつか。」

頬をポリポリと掻きながら明後日の方向を見る雄二。照れているなんて意外だな。

「坂本！握手してくれ！」

「俺も！」

もう英雄扱い。この光景を見るだけでどれだけ皆がああ教室に不満を抱いていたが分かる。そりゃ嫌だろうな……………ブルルッ！またあんな光景を思い出した……………言わなくてもわかるだろう？

そんな中、明久が先ほどの恨みを晴らすためか、Fクラスの面々に混ざりながら雄二のところに行った。

「雄二！」

「ん？明久か。」

雄二が明久の方に振り向く。そこに颯爽として明久が駆け寄る。

「僕も雄二と握手を！」

明久は手を突き出した。

「ぬおおっ！」

ガシッ

「雄二……！どうして握手なのに手首を押さえるのかな……！」

「押さえるに……決まっているだろうが……！フンッ！」

「ぐあっ！」

明久の手首が捻りあげられ、たまらず悲鳴をあげ、握りこんでいた包丁を取り落としてしまう明久。

「……………」

「……………」

「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいよね。」

「……………」

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな関節が折れるように痛いっ！」

「今、何をしようとした。」

「も、もちろん、喜びを分かち合う為の握手を手首がもげるほどに痛いっ！」

「おい。誰かペンチを持ってきてくれ！」

「す、ストップ！僕が悪かった！」

「……チッ」

明久が手首を解放された。ものすごい痛そうだったな……。
というかペンチなんて何に使う気だったんだ？

「……ブツブツ……」――生爪――「」

怖っ！高校生が考え付くような行為じゃない！
そして明久が忠誠を誓うポーズをしている。
ホラ。エジプトの壁画にありそうな感じのポーズだ。

「まさか秋本がFクラスだなんて……信じられん。」

後ろから平賀の声。

振り向くとそこにはヨタヨタと歩きよる平賀の姿があった。実は平賀と俺は同じ中学校だったので、それなりに面識があるのだ。

「なんか騙し打ちみたいですまなかったな。」

俺が平賀に謝る。別に悪いことをしたって訳じゃないが、俺はこういう姑息な事はあまり好きじゃない。
する必要があるなら躊躇うことなくやるけどね。

「いや、謝る事はない。すべてはFクラスを甘く見ていた俺達が悪
いんだ。」

これも勝負だからな。

平賀はこうやって自分の非はしっかりと認める輩なので、他のDクラス面子からの非難がほとんどない。

本来、クラス代表は勝てば英雄として崇められるが、負ければ戦犯として扱われクラスの面子に恨まれるのだが……

人徳ってやつだな。

「ルールを則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

「いや、その必要はない。」

明久がそう雄二に問うと、俺も予想しなかった返事がかえってきた。

「え？なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ。」

それは当然のことであるかのように告げる雄二。俺は雄二の言うことがすこし分かったかもしれない。

「雄二、それはどういうこと？折角普通の設備を手に入れることができたのに。」

明久の言うこともわかるが、俺たちの目的は悪魔でAクラス。ここでDクラスの設備を取ったら、その設備に満足してやる気が下がる人があるかもしれないからだと俺は思う。

「忘れたのか？俺達の目標はあくまでもAクラスのはずだろう？」

「でもそれなら、なんで標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか。」

明久……ミーティングの時に、戦争に慣れさせるためと勝って士気を上げる為、そして作戦に必要なプロセスと言っていただろう。プロセスが何かは俺も知らないので雄二だけが知っているが。

「少しは自分で考えろ。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ。」

リアルな冗談だなあ。

「なっ！そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」

「おっとすまない。近所の小学生だったか。」

「……人違いです。」

「まさか……本当に言われた事があるのか……？」

「え……まじで？いや、いくらなんでもそれはないだろう……？」

俺と雄二が驚愕して明久を可愛そうな目で見てあげる。

明久がすごく悲しそうな目をしている。

「と、とにかくだ。Dクラスの設備を一切手を出すつもりはない。」

明久のことが居た堪れなくなつたので雄二が話を戻す。

「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

「もちろん、条件がある。」

そりゃそうだな。このまま解放したら意味がない。

「一応、聞かせてもらおうか。」

「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい、それだけだ。」

雄二が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

でも、この室外機はDクラスではない。ちょっと貧しい普通の高校レベルの設備でしかないDクラスにエアコンなんてものはないのだから。

置いてあるのはスペースの関係でここに間借りしている――

「Bクラスの室外機か」

「設備をこわすんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

悪い取引であるはずがない。うまく事故に見せかければ厳重注意で済み、それだけで三カ月もの期間をあの教室で過ごすという状態から逃れられるのだから。

しかし、雄二がいていたプロセスとはBクラスの室外機を壊すことなのか？直接戦争に関係のない物にダメージを与えてどうするつ

もりなんだろう？

「それはこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな。」

「そうか。ではこちらはあるがたくその提案を飲まして貰う。」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう言っていていいぞ。」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ。」

「ははっ。無理するなよ。勝てっこないとおもっているだろ？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスの勝てるわけがない。ま、社交辞令だな。」

「じゃあ、と手を挙げて軽くなった足取りでDクラス代表、平賀は去って行った。」

「さて、皆！今日は御苦労だった！明日消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！解散！」

雄二が号令をかけると、皆雑談を交えながら自分のクラスへと向かい始めた。帰りの支度をするのだらう。

「雄二。僕らも帰ろうか。」

「そうだな。」

勝てたという満足感が大きいが、正直疲労もかなりある。まだ戦争はつづくようなので、今日はもう帰りたい。

「あ、あのっ、坂本君っ」

「ん？」

皆の後を追って教室に向かおうとする雄二を呼び止める姫路。

「お、姫路。どうした？」

「実は、坂本君にききたいことがあるんです。」

胸に手を当てながら興奮気味に話す彼女。大事な話みたいだから。俺は席を外した方がいいな。

明久も俺と同じようなことを考えているようで目配せをしてきた。

「おう。分かった。」

そう答えると、雄二は姫路と一緒に俺から少し離れたところで話を始めた。

顔を見ると、姫路は

目をまっすぐに雄二を見ていた。俺たちのほうを一切見ずに。よほど大事な要件なんだろうか。凄く集中しているように見える。隣の明久をみると、寂しそうな顔をしてから興奮している顔になったり悩んでいたりと百面相をしていた。

「おい、明久。さつきからどうしたっていうんだ。」

「…へっ！？姫路さんのスカートを捲り放題なのは！？なんて思
ってないよ！？」

「………… お前の性癖はよくわかった。いいか、俺に近づくんじゃな
いぞ？」

「え？ああ！？違う！今のはつい僕の本能が表に出てしまっただけ
なんだよ！？」

「つまりお前の本音じゃないか。」

明久の性癖を理解している間にも続く二人の会話。

「さて。そう言えば、振り分け試験で何かあったみたいだが、それ
と関係があるかもしれないな。馬鹿には馬鹿なりに譲れないものが
あったみたいだが、それと関係があるかもしれないな。」

茶化すように、愛嬌たっぷりの笑顔で答える雄二。どこか誇らしそ
うで楽しげだ。

「振り分け試験って———それじゃ、やっぱり。」

「俺の口から言って良い範囲はこれが限界だと思うが———多分、
姫路の想像は間違っていないと思うぞ。」

「さて、明久、そろそろ帰るぞ。」

「あ、うん。姫路さんとはもういいの？」

「ああ。これで決心も固まっただろうし、な？」

雄二が問いかけると、ボンツと音が聞こえてきそうなほどに姫路さんの顔が真っ赤になった。

さつきから明久の事をチラチラみているが……ああ、明久に好意を寄せてるのか。

てことは雄二に何かを聞いていたがそのことに関してのことかな？

「ふーん、そつか。よくわからないけど、それじゃ帰ろつか、姫路さん、またね。」

「あ、はい！さようなら！」

顔を赤くしたまま手をブンブンと振る彼女に見送られている明久と共に俺と雄二は教室を後にした。

.....

「それにしてもさ。」

「ん？」

「Dクラスとの勝負って本当に必要だったの？別にエアコンくらいなら他の方法でも壊せたと思うけど。」

「ああ、そのことか。」

帰り道。俺と明久と雄二は家の方向が同じだからよくこうやって一緒に帰っている。というか明久の家から50Mぐらい離れたところに俺の家がある。高校に入る頃ついでに家族念願の一軒家と土地を買い、引っ越しを済ませたのだ。

明久の家に近いのは完全に偶然である。しかし、だからといって朝、明久と一緒にいくかというとなんかそうじゃない。

なぜなら、明久は朝起きるのがおそいし、起こしにいつてもすぐに起きないので一緒に遅刻してしまうからだ……なぜか明久はいつもギリギリ学校に間に合っているが、俺はそんな生活は御免である。弁当はいつも学校で渡している。

「理由はほかにもある。クラスの皆を戦争に慣れさせる為だとか、他のクラスにプレッシャーを与える為だとか、自信をつけて士気を上げる為だとか。」

「ふーん。それじゃ、Dクラスの設備を手に入れなかったのは？」

「目的はあくまでAクラスだからな。Dクラスの設備を手に入れることで一部の奴らが満足して試召戦争に反対し始めるかもしれないだろう？ そうならない為と、不満によるモチベーションを維持するためだ。」

さすが、雄二。こうして話を聞いていると、とても馬鹿だとは思えない。神童再び、って感じだ。

「Aクラスに勝てるかな？」

「無論だ。俺に任せておけ。」

「……ありがとう。ぼくのわがままの為に。」

「別にそんなわけじゃない。試召戦争はおれがこの学校に来た目的そのものだからな。」

雄二はテストの点数がそのまま召喚獣の戦闘力になる試召戦争で点数で劣るFクラスが知恵と体力でどうにかしてAクラスを倒すことで、勉強しなくてもトップになれるということを証明したいのではないのかと思う。

「目的の為に、明久やナルにだってきっちり協力してもらうからな。とりあえずは明日の補給テストで。」

「……ぐう」

ところで、俺や姫路は振り分け試験でテストを受けていないのになんで点数があるのだと思っている人もいるだろう。今更だが、もし振り分け試験を受けていなかった場合。その前に受けた試験の点数を代用とされる。もちろん戦死で点数が無くなった場合は、試験を受けなおさなければならぬが。

それに俺は召喚獣が傷つけられるまえに、相手を倒したので点数が減っていないので試験は受けなおさなくてもいい。

「ゲームばかりしないで、寝る前に少しくらい勉強もしておけよ。」

「俺は勉強なんて基本してないけど。授業はまともに受けてるだけ。」

「お前はそれでも勉強できてるからいいだろう。明久は出来てはいないからな。」

「はいはい。教科書ぐらいは読んで……ん？」

明久が急に立ち止った。どうしたんだ？

「あ！教科書、卓袱台の下に置いたままだった！」

「……あほ。さっさと取ってこい。」

「何故お前は毎回なにかボケをかまさなきゃ気が済まないんだ。」

「うう……、んじゃ、先に帰っていいよ。」

「おう。今日は疲れたから帰ってすぐ寝るわ。」

「もちろんだ。待ってるわけがないだろう。」

「わかっていたけど、雄二の薄情者。」

そのまま俺と雄二は雑談をしながら途中で別れて、家に帰宅した。

「ただいまあー。」

「あら、おかえり。今日は遅かったわね。」

玄関で靴箱を整理している母親がいた。

「ウチの学校名物の試召戦争をしていたんだよ。」

「へえ、奈留の召喚獣みたいだね。召喚獣は本人のデフォルメした姿なんですか？」

「まあね。とりあえず疲れたから寝るよ。夕飯が出来たら起こしてくれ。」

「はいはい。」

こうして俺達の初の試召戦争を勝利し、一日が終えた。

第六話（後書き）

今回は恐らくつまらない回になりました。
今日の夜、また次話を投稿します。

もし振り分け試験を受けていなかった場合。その前に受けた試験の
点数を代用とされる。

はこれもまたオリ設定です。
別に原作ブレイクするほどの事でもないですよね？

第七話（過去編）（前書き）

過去編ですね。（番外かな？）

たぶん糞文になった。というか糞文。
特に後半

第七話（過去編）

文月学園に入学し初の春休みでの出来ごと。

俺は家で情眠を貪っていた――

ブブブッ

All of us believe that this is
not up to you――
The fact of the matter is that
it's up to me――

Hey! Hey! Hey!
Hey! Hey! Hey!

Let's Go――

枕の横に充電しながら置いてある携帯電話から着信電話が来て俺の好きな曲が流れ出した。

んう……誰だよ……ぐっすり寝ていたのに……

枕元においてあるはずの携帯電話を寝ながら音をたよりに手で探り、見つけて携帯を開いた。もう午後一時だった。

自分の起きる遅さに軽く驚きながら、気だるそうに電話に出る。

「もしもしい…だれですかあ？」

寝起きのせいか、つい間の抜けたような声がでてしまう。

「……康太。今日、今すぐ合コンに来て欲しい。」

ムツツリスケベの康太だった。合コン？今すぐ？

「にやんで合コン？今からあ……？眠いからパス……おやすみい……」

そう言つて俺は電話を切ろうとしたが止められる。

「待つて。来るはずの合コンメンバーが一人急遽来なくなつて人数バランスが取れない。だから来てほしい。それに一時半に待ち合わせ」

康太にしては珍しく口数が多い。……仕方ない。親友の頼みだ、行つてあげよう。

この時の俺は寝ぼけてどうかしていた。まさかあんなことになるなんて――

「んにゅう…お金とか持つてないよ…？何処に行けばいいの…？」

「……家の前にいる。お金はこつち持ち。」

ええ…まじかよ…まあお金がそつち持ちなら構わないか…

俺は重い身体を5秒くらいかけて起こし、ベッドの横に置いてある

タンスから適当に服を取り出して着る。（ジーパンに長袖に上着）
そして洗面所に向かい顔を冷水で洗い、運よく寝ぐせがほとんどつ
かなかった髪の毛を櫛で軽く梳いてから髪を纏めポニーテールにし
てからゴムで止める。

顔を洗ったおかげで目が覚めた。

ここまでで僅か5分ほどだ。我ながら素早い行動だと思う。そして、
母親に出かけることを伝える。ちなみに父親は仕事である。
一応平日だからな。

「母さん、ちょっと友達と遊んでくる。」

「昼に起きてきながら急な話ね。お昼ご飯はどうするの?」

「外で食べてくる。お金は友達持ち。向こうが頼み込んだ来たんだ
から、それくらいいいでしょ?」

「仕方ないわねえ……いつてらっしゃい。ナル。」

「いつてきまゝす。」

そう言つて俺は家から出る。さっき言つてた通り、康太が家の前で
待っていた。

「ふわああ……急に呼び出すなよ康太。折角ぐっすりと寝ていた
のに。」

「……………（パシャパシャッ）」

「ん?なんかした?」

「……………なにもしていない。（ナルのあくびしている写真く若干涙目）がうまく撮れた。」

なんか音が聞こえた気がするが気のせいかな。まだ寝ぼけてるのかな？

「そうか……ところで何処にいくんだ？てか合コンって俺は彼女とか作る気はまだないぞ？」

ほら、なんか恥ずかしいじゃん？分からない？そうですか。

「……………彼女？彼氏の間違い？」

「親友といえども本気で殴っても良い時があると思うんだが、そこんどこどう思う？」

「……………っ！……………すでに殴っている人の言葉じゃない。」

おっと。もう一人の俺がいつのまにかゲーセンにあるパンチングマシンで最高得点を叩きだした。俺の自慢のボディブローを康太にかましていた。

すまない。悪気はなかったんだ（笑）

「……………この近くにあるガス。」

「ふーん……………そういえば合コンって初めていくな。会話をするだけでいいのか？」

「大体そんな感じ。」

そんなやり取りをしてから康太が何も言わず歩きだした。
俺はガトへの道を知らないので、康太について行く。

.....

ガストに一時二十五分で着いた。

一応待ち合わせ時間までに着いたようだ。そして俺達は店内に入り、
康太がキョロキョロと周りを見渡していると誰かに呼ばれた。

「おい。ムツツリーニ、こつちだ。これで全員そろったな……秋本
もよく来てくれた。これで男女のバランスが合う。」

須川が呼んだようだ。そういえばメンバーとか人数を聞いていなか
ったな。

男子の面子を見ると、須川亮、根本恭二、ムツツリーニ、そし
て俺だ。

対する女子は、小山友香、一年の終わりごろに転校してきた工藤愛
子に玉野美紀、木下優子に木下秀吉がいる……………ん？

「おい、秀吉。なんで女側にいるんだ。お前がいるのなら俺いらな
かったんじゃない？」

「おお……ナルか。実は姉上が恥ずかしいからアナタも来な——ど
うしてワシの腕をつかむ？あつ、姉上っ！ちがつ……………！その間接は
そっちには曲がらなっ……………！」

「貴方は余計な事は言わなくていいのよ!!」

店の中で暴れるな。

とりあえず、すでに合コンメンバーは全員待ち合わせ時間までに全員集まっていたようだ。

それとこの面子はどんな関係で集まったんだ。バラバラすぎるぞ。しかも、全員文月学園の一年生だし。

ちなみに席の配置はこんな感じだ。

		壁		
	小			根
	玉			須
	優	机		△
	秀			俺
		工藤		

「さて、全員集まったことだし知っている間柄もいるだろうが、自己紹介からはじめようか？」

須川が場を仕切って言った。

「言いだしっぺの俺から自己紹介をするよ。俺の名前は須川亮。誕生日は_____で、趣味は中華料理に関する研究、料理をするのが好きだ_____順番は時計周りにしようか。」

「…………土屋康太。特技は情報操作と隠密行動。」

おい。合コンでその紹介ってどうなんだ？色々アウトだろう。つと。次は俺か。須川の紹介を真似れば問題ないかな？

「俺は秋本奈留。誕生日は3月2日。趣味は音楽を聴いたり歌を歌ったりするのが好きだ。音符は読めないけどね。他には身体を動かすのと、動画サイトで面白い動画を探すのが最近の趣味かな？」

「へえ、音楽好きなんだ？私も最近洋楽にハマっているんだよね。あ、そうだ！ご飯食べたらず皆でカラオケに行かない？」

工藤の容姿は一言でいうとボーイッシュだ。だからといって決して女に見えないというわけではないが。むしろ、可愛い。そして工藤がカラオケに行かないかと皆に提案した。

「ふむ、たしかにカラオケは面白そうだな。俺は賛成。皆はどうだ？」

須川が賛成して皆の意見を聞く。

「俺も構わないぞ。」

「私も構わないわ。」

「あ、えつと…私も構わないですっ」

「…………問題ない。」

「俺はむしろ行きたいな。」

「ワシも構わんぞい。」

「あ……えつと……。」

根本から順に小山、玉野、工藤、康太、俺、秀吉、優子の順に答えた。

木下（姉）が何故か言い淀んでる。歌が苦手とかなのかな？

「どうした。木下さん。何か都合が悪かったりしたか？」

そんな木下（姉）に質問をする須川。

「つつ……いえ、問題ないわ。私も賛成よ。」

じゃあなんで言い淀んだんだろ？まあいいか。

「じゃ、後で行こ……っあ、ごめんね。自己紹介の流れを止めちゃつて。」

「いや、構わないさ。次、工藤さんだぞ？」

「うん、ボクは工藤愛子。特技は保健体育、特に実技だよ！趣味はさっきも言ってたけど、洋楽が最近の趣味。誕生日は——だよ！」

工藤、特技のところがおかしい。なんだ実技って。なんで得意なんだ。未成年だろう。

「…………っ！！（ブザー！！）」

康太が女子に見られない為に机の下に潜って鼻血を出した。

「<ちよつ、康太！大丈夫か！？ほれティッシュ！>」

「…………（ツメツメ）<助かった。>」

鼻血の出る勢いがおかしい。下手な水鉄砲より勢いがあつたぞ。康太は鼻に詰めたティッシュが見えないように奥に詰めている。

「次はワシじゃな。ワシは木下秀吉。特技はモノマネと演劇。趣味も演劇じゃ。誕生日は——じゃ。」

「私の名前は木下優子。趣味は小説、主にラノベを読んでいるわ。誕生日は——よ。」

「玉野美紀です。趣味は優子さんと同じ小説です。ラノベではなく、歴史関連の小説ですが。誕生日は——です。」

「小山友香よ。趣味はドラマや映画、推理小説も好きね。誕生日は——よ。」

「根本恭二。好きな事は、勝負事に勝つことだ。あの勝った時の達成感がなんともいえないな。誕生日は——。」

各自の自己紹介も終え、食べ物を注文して。今は料理を待っている状態だ。

「ところで女が6人ってバランス悪くないかしら？」

小山が馬鹿なことを言い出した。お前の目は節穴だ！

「何を言っただ。男が5人の間違いだろう？」

俺がそう反論すると。

「???男は土屋君と須川君と根本君だけでしょ？」

「……………秋本と秀吉は男。」

俺と秀吉は机に突っ伏して涙をながして嗚咽をこぼしていた。

「ええ！？秋本さ……………君と木下君って男だったの！？」

「本当！？ボクより女っぱいのに！？」

「男なのに女の私より可愛いなんてずるいです！」

「貴方も男だったの！？秀吉と同じような存在が二人もいるなんて

……………」

「なにに！？（なんてことだ！秋本を狙っていたのに！）」

小山さんから始まり工藤、玉野、木下（姉）、根本の順だ。

康太と須川以外誰も俺の事を男だと分かってくれていなかった！

（しかも二人と同じクラスだった。）

「……………秀吉。お互い頑張ろうな。（ガシッ！）」

「ナル……！（ガシッ！）」

俺と秀吉は友情という名の絆をさらに深めあい手を握り合った。そんな事をやっているうちに注文した料理がやってきた。

「お、やつと来たようじゃのう。」

「一気に全部来たな。」

普通一つずつ持ってくると思うが細かいことはどうでもいいや。

「じゃあ、いただきます。」

「……………いただきます。」……………

「ねね、私は文月学園に最近転校してきたんだけどさ、皆はなんで文月学園に入学したの？私は親の仕事の都合でこの辺に引っ越ししてきて、最近有名な文月学園の事を知ったから、どんな学校か調べてみたら色々、面白そうな学校だったから入ったんだよ。」

工藤が話題を持ち出してきた。

明るく話しやすい性格の彼女のおかげで会話が途切れず、気まずい空気などが出来ずに楽しく合コンが進んでいる。

「俺は、学校の偏差値が高く大学進学率が高い高校なのに合格しやすいといつかかなり良い学校だったからだな。」

「ワシもじゃ。」

「俺は第一志望の高校に落ちて第二志望の文月学園に合格したからだな。今となつてはこっちに入つてよかったと思つているがな。」

須川と秀吉は同じ理由で根本にとっては滑り止めだったらしい。

「私は自分の努力次第でどこまでも点数があがる方式をとつていることに興味を持ったからだわね。」

木下姉は優等生と聞いているがたしかにそれっぽい台詞だなあ。

「私は根本君の逆で正直入れると思つていなかったんですが、合格してしまつたので入りました。」

「近いからという理由で私は入つたわ。」

「……………黙秘権を行使する。」

「俺は召喚獣システムとやらがどうしても見たくてな。それに祭りなどのイベント関連が楽しそうな学校だったからだな。」

玉野、小山、康太、俺の順。

皆それぞれの理由があるが、こうして話し合つてみると結構理由が違つたりするんだな。

あと康太、なぜ黙秘する必要がある。

そんな感じに雑談をしながら過ごしていく。というかこれって合コンというよりただの雑談場じゃない？

「ふう、皆食い終わつたようだな。会計を済ましてカラオケに行こうか。」

須川がやはり仕切る。以外とリーダー性があるんじゃないか？

会計をすまし、近くのカラオケ店に集団で行く俺達。

なんか木下姉弟がすこし後ろの方で話し合っているがどうしたんだろつか？

「く秀吉、私が歌が苦手なのはしてるでしょ？だから私とすり替わってよ！私は秀吉として帰るから。」>

「く苦手なら苦手といえいいじゃろう。何故帰るのじゃ？>」

「くいいから！黙って私の振りをしてればいいのよ！カラオケ店についたらトイレなりなんなりと誤魔化せばいいのよ！当然、服も交換だからね！>」

「くむ、むう…仕方ないのう…>」

.....

カラオケ店についた俺達。

「何時間にしようか？」

「ん、今は3時だから……この人数だから四時間くらいでいんじゃないかな？」

どのくらいカラオケで歌うか皆に意見を求める須川それに答える玉野。

「ふむ、妥当なところだな。4時間にしよう。皆、金は足りるか」
「あれ？秀吉はどうした？」

「ああ、秀吉ならさつき急な用事が出来たって「本当にすまないのじゃ」って言うてから帰って行ったわよ。」

「むう、そうか。それなら仕方ないな。」

皆金が足りたので須川が皆から金を受け取ってカラオケの受付に行き部屋を借りた。

「何の歌を歌おうかなー」

皆、順番に歌う曲を決めていく。

根本、俺、工藤、ムッツリーニ、小山、玉野、須川、木下（姉）の順で歌うことになった。

一番目は根本からか。

マキシマム ホルモンのWhat's Up, people?!
を歌うようだ。まじかよ……

便利便利万歳 便利便利万歳 便利便利万歳 人間

便利便利万歳 便利便利万歳 便利便利万歳 人間

ほらビリビリ怒らすか？ ビリビリ怒らすか？ ビリビリ怒らすか？

？ 人間

ほらビリビリ怒らすか？ ビリビリ怒らすか？ ビリビリ怒らすか？

？ 人間

しかもテラうめえ。

そして根本が歌い終わり、

「すごいよ！？根本君本物とそっくりだったんだけど！」

「これは……意外な特技ね。」

二番手は俺のoffspringのAll I wantだった。

Y a y a y a y a

Day after day your home life's
a wreck

The powers that be just breathe
e down your neck

You get no respect, you get no

relief
You gotta speak up and yell out
your piece

So back off your rules
Back off your jive

Cause I'm sick of not living
To stay alive

Leave me alone

I'm not asking a lot

I just don't want to be controlled

That's all I want

That's all I want

That's all I want

That's all I want

Y a y a y a y a

「秋本君もうま！何？次私んだけど絶対クオリティの差が激しくて盛り上がらないよ！？」

まあ、こんな感じに皆の持ち歌を歌っていた。

工藤さんはニコニコ動画にあった。おちやめ機能を歌っていた。
似合いすぎなんだが……

ムツツリーニは何故かHBBしかやらなかった。
ヒューマンビートボックス

口で「ボンスカチュカチュカスカチュカボン」などと鳴らすやつだ。
歌えよ。

小山さんはまさかの演歌だった。
かなりしぶかったです。

玉野さんは普通の歌、「翼を下　い」とかを歌っていた。決してうまいというわけじゃないが、なんか雰囲気是和んだ。

須川はY o uはショック！みたいな熱血系の歌を歌っていた。
とても暑いです。いや熱いです。

木下姉はというと……もってけセーラー服を歌っていた。
いわゆるオタク系だ。
しかも妙にうまい。皆少し引いていた。

「もう時間か。一人4〜5回しか歌えなかったな。」

「……………疲れた。」

「そうだね〜歌った回数自体は多くないけど、楽しく過ごしていたからか大分疲れたよ。」

そして部屋から出て受付に皆でお金を払い、小山と須川、俺と根本、木下（姉）と玉野と康太、の三つに分かれてそれぞれ帰宅した。
そうして俺達の合コンは終わった。
のだが……………

.....

side 小山

もう七時ね。中々楽しめた合コンだったわね。
ただ遊んでいるだけのような気もしたけれど。

「オカザイルってまた人数増えてるわよね。知ってた？それにしても14人の岡村とか、よく集まったわね」

「えっ7人から増えたのか？どんだけ増えるんだよオカザイル。」

「そこの姉ちゃん待ちなよ。」

誰？いきなりなんなのよ？ナンパ？

「なあ、姉ちゃん俺らと遊ばない？こんなぼう男なんてほっといてさあ。」

二人組の男達の片割れが須川君に近づき。

ドンッ

須川君が思いつきり押されたので地面に尻もちをつく。

「なっ！やめなさいよ！大体私はもう帰るのよ！貴方達となんて遊ぶわけないじゃない！」

「ああ？いいんじゃない。すこしくらい付き合ってくれたってさあ。」

「おい！やめろよ！この屑どもが！！！」

須川君が二人組の男たちを罵倒し、その片割れの顔面にストレートを放った。

そして殴られた片割れが逆上しナイフを出してきた――え？

「キ……キヤアアアアアア！！！」

side 秋本

キヤアアアアアア！！

「！？今のって小山の声か？」

「俺も小山の声に聞こえたが・・・」

「須川もいるはずだが…あいつら向こう側の方から帰ってたよな？様子を見に行こう！」

「ああ……！」

俺は根本に確認を取ってから、俺達は悲鳴の聞こえたほうに走る。

2、3分も探すと小山さん達が見つかった。

知らない男の一人が小山さんを組みふせて口を塞いでいて。もう一人の男が須川にナイフを刺そうとしている様子が見える。

俺は小山さんのほうを助けに行き、根本が須川を助けに走った。俺は小山さんを押さえつけている男を後ろから、脇腹を蹴り飛ばして気絶させてやった。ボキッという音が聞こえたので骨が折れたかもしれないが犯罪者の骨などいくら折れたとしても俺の良心には響かない。

根本はナイフを持った男を後ろから羽交い絞めにし、須川が身動きをとれるようになり、須川が自分を刺そうとしていた男のナイフを奪い取ってから腹にアップパーを食らわせた。男はどうやら気絶したようで全く動かない。

「大丈夫か？須川、小山。」

「何があっただ？」

須川達に状況を聞く。

「まじかよ。というかこの辺にこんな奴がいるなんて思わなかったな。」

この周辺は非常に治安が良い事で有名なのだが……

「ふん、やるならもつとばれないとこでやるべきなんだ。」

根本。そもそもやることすら駄目なんだよ。

！！根本後ろ！

「根本！後ろ！」

「ん？つが！？」

須川が気絶させたと思っていた男が立ち上がって根本を後ろから頭を殴った。

「こんの糞ガキヤア、ガッ！？」

須川がもう一度腹にボディブローをかまし今度こそ気絶させた。

また実は気絶してないとかだったら怖いので。一応俺がもう一度全力で腹をけとばしてから根本に声をかける。

「根本！大丈夫か、頭から血が出てるぞ！」

「だ、大丈夫だつ。（ちょ！顔近い！）」

根本は頭を殴られたから血を流してるのではなく倒れた際にアスファルトの地面に頭をぶつけたのが原因だろう。

俺は持っていたハンカチを根本の頭に押さえつける。

「つつ！いつてえ・・・」

「目眩とかしないか？」

「つつ！！ツダダダ大丈夫だ、問題ない。（プイッ）」

むう、大丈夫ならなんで目をそむけるんだ。大丈夫じゃないって言うてるようなもんじゃないか。

とりあえず警察を呼んだ。犯罪者とはいえ骨を折ってしまったので一応救急車も呼ぶ事にした。

事情聴取で20分程時間をとられたがすぐ帰る事が出来た。念のために根本も病院に運ばれた。

side 根本

「根本！後ろ！」

「ん？っが！？」

どうやら俺は後ろから殴られたようだ。っち油断した。俺もナイフ

で戦ってやろうか？

そう思っていたら須川が俺を殴った奴を倒していた。

「根本！大丈夫か！？頭から血が出てるぞ！」

ちよ！顔が近い！しかも秋本のサラサラな髪が俺の鼻をくすぐる。
いい匂いだ。

じゃなくて！

「だ、大丈夫だっ」

大丈夫と言っているのに秋本は自分のハンカチを俺の頭にある傷を
押さえる。

「つつ！いつてえ・・・」

「目眩とかしないか？」

「つつ！！ツダダダ大丈夫だ、問題ない。（プイッ）」

秋本のやつかなり心配そうな顔で見つめてくる。……かわいいじゃないか！糞！

つい、恥ずかしくなってしまう顔を背ける。

やさしくてかわいいとかかなりの優良物件じゃないか。

女じゃなかったからさっきは諦めたが、案外男でもかまわないかも
……………

っは！何を考えているんだ俺は！俺はホモじゃない！ホモじゃない
んだ！

そんな事を考えていると俺の言葉を信じていないのか、今度はムッ

とした顔で俺を見てくる。

ぐふおお！？

さつき殴られた痛みよりダメージが！！

考えてみれば性別なんて些細な問題だぜ！ヒヤッハー！

根本side nd

side 小山

まさか自分がこんな事件に巻き込まれるなんて思わなかった……

「おい、小山さん怪我はないか？」

須川君……自分のために身体を張って守ろうとしてくれた人。

「小山？」

「……えっ？あ、だ、大丈夫よっ！！」

「そうか、よかった。」

須川が満面の笑みでこちらをみながら言ってくる。決して美形とかではないのだが何故か恰好よく見える。そして顔が赤くなる。今まではそんなことはなかったのに、何故なんだろう……？

「ところで小山。」

恋？いやそんなことはないはず。自分は頭がいい人が好きなのだ。

須川はむしろ頭が悪い部類に入るだろう。そんな人を好きになるはずがない。

だがしかし、好きでないのなら、それでは今のこの自分の気持ちは一体………

「付き合ってくれ」

えっ。えっ————！！！！？

「え、あ、その、駄目よ！！！」

「そんなバカなあああああああ！」

須川が泣きながらどこかへ去って行った。

いきなり付き合って宣言をされてつい、反射的に断ってしまった。
今、自分は何故かものすごい顔が熱く胸がドキドキしている。

いや、私は自分の気持ちを誤魔化してはいけない。やはり自分は須川
川の事が・・・

あれ？なぜか私、損した気がする。

好きな男性の告白を断った？

あっ・・・・・・・・・・・・・・・・

小山
side
end

第七話（過去編）（後書き）

一応この話で次のBクラス戦の内容が原作と変わりますが、そんな必要なかったですかね？

オリジナル性が全くないのも問題だと思って付けくわえたんですが

その結果がこれだよ！

根本真人間じゃん！

須川主人公属性まざっちゃってるじゃん！

玉野さん影うすすぎるじゃん！

ムツツリーニ以下同文じゃん！

工藤さんも似たようなもんじゃん！

木下姉弟も（ry

やっぱりいらないかな？

その辺の意見感想で送ってほしいです。
アンケート

1、このまま続ける

2、こんなストーリーいらね。糞文乙。普通に原作道理にやれ。

（つまりこの第七話を消して普通に書く）

よろしく願いします。

期限は ー なんとなく明日の12時までで。（早すぎるかな？）

第八話（前書き）

アンケートの結果第七話は消さずに採用されることになりました。
答えてくれた方々ありがとうございました。

第八話

Dクラス戦に勝った翌朝、いつも通り学校に向かい、Fクラスに入り席に座る。

「おはよう。秀吉。」

「おはようなのじゃ、ナル。今日はテスト漬けじゃから頑張らねばの……」

秀吉がすこし疲れたような表情をする。

そつ、今日は試召戦争で消費した点数を補給する為にFクラスの皆はテスト付けなのだ。しかし、俺は点数を消費していないのでゆっくりにできる。

「アハハ…まあがんばれ。俺はする必要がないけどな。」

ガラガラ

「おはよー」

「おう明久。時間ギリギリだな。」

俺が来て、少し遅れてから入ってきた明久。

「ん、おはよう雄二。」

雄二は英語の教科書を持っている。一応テスト前の悪あがきをして

いるようだ。

「皆には何も言われなかったの？」

「ん？何がだ？」

「Dクラスの設備の事。」

ああ、そういえばDクラスの設備はいらないと雄二が言っていたな。たしかに、折角勝って手に入るはずのDクラスの設備を手放したのだ。クラスの奴らに理由も言わずに勝手にそのような事をすれば不満がでるというのも必然というものだ。

「ああ。皆にもきちんと説明をしたからな。問題ない。」

「ふーん。」

いつ説明したんだ？ああ、俺らが来る前にいったのかな。皆が素直に聞いたのなら、それは昨日の雄二の働きを評価しての事だろう。もつと上を狙えると分かった以上、Dクラス程度の興味が無いといったところだろうか。

「それよりお前はいいのか？」

「何が？」

「昨日の後始末だ。」

ああ。島田と船越の件のことか？
きつと明久に明日はない。

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされると分かっているながら行動するなんてありえないよ。」

「いや、俺の始末じゃなくて。」

明久が雄二の始末と勘違いしている。

「一体何がしたい――」

「吉井っ！」

「じぶあっ!」

明久の台詞が突然の島田の鉄拳制裁によって遮られる。

「し、島田さん、おはよう………」

「おはようじゃないわよっ！」

「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器のいたずらと窓を割った件の犯人にしたてあげたわね……!」

明久があ、そうか。と思ってそんな顔をしている。

「おかげで彼女にしたいくない女子ランキングが上がっちゃったじゃない!」

代わりにお姉さまになってほしいランキングNO、1じゃなかったっけ?

島田も中々不憫だな。

「――と、本来は掴みかかっているんだけど。」

島田が急に冷静さを取り戻す。

掴む前に殴っているから大差ないんじゃないか？

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる。」

「うん。さっきから鼻血が止まらないんだ。」

「いや。そうじゃなくてね。」

「ん？それじゃ何？」

「一時間目のテストだけど。」

島田が楽しそうに、本当に心から愉しそうにそう告げる。

「監督の先生船越先生だって。」

明久が血相を変えて教室から飛び出した。

.....

「うあー……づかれたー」

机に突っ伏す明久。

朝から船越先生とひと悶着起こしてさらに、四教科ものテストを終わらせたのだ。そりゃ疲れるだろう。

明久いわく近所のお兄さん（三十九歳／独身・・・お兄さん？）を紹介し、昨日の事もその事だという事にして、争いを避けたそうだ。

「うむ。疲れたのう。」

「お疲れ。ほれ、弁当だ。コーラもやるよ。」

俺は明久の分と自分の弁当を持って。さりげなく明久に近づき俺と秀吉が答えた。

今日は秀吉も髪をポニーテールにしているので、俺とお揃いだ。

「…………（コクコク）」

無口な康太もいつの間にか明久の近くに寄っていた。

「おお！ありがとう、ナル！さて中身は何——僕のカロリーがあああつ！？ジュースにすらカロリーがない！？」

弁当の中身はぎっしり詰められたこんにゃくだけが入っている。コーラはコーラでも、ダイエットコーラだ（笑）

「ほれ、折角明久のために作ってきたんだ。心して食えよ。」

「…………妬ましい。」

「うまそうじゃないか、明久。よかったな食うもんがあつて。」

「うう……僕の貴重なカロリー源が……」

「アッハツハ、まあいいじゃん。姫路が弁当作ってくるって言つてただろう?」

正直、弁当は明久いじりのために持ってきたようなものだ。

「はい。弁当を持ってきましたので……その。」

「おお、楽しみじゃのう。」

「は、はいつ。迷惑じゃなかったらどうぞつ」

と後ろに隠していたバッグを出してくる。

姫路さんが約束通りに弁当を持ってきた。

「迷惑なもんか! ね、雄二!」

「ああ、そうだな。ありがたい。」

「そうですか? 良かったです」

ほにやつと嬉しそうに笑う姫路さん。不思議だ。ご馳走してあげる側なのに喜ぶ何て。

ああ、そうえば明久のことが好きである疑いがあつたな。だから姫路は嬉しそうなのか?

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……」

明久を親の仇のように睨んでいる島田。
お前はなんで怒っているんだ。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上に行くかのう。」

「そうだね。」

こんな腐った畳と男の臭いしかない場所で頂くものではない。屋上の気持ちいい空間で弁当を味わうべきだろう。

「そうか。それならお前らは先に行つててくれ。」

「ん？雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな。」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないでしょ？」

と珍しく気遣いをみせる島田。

「悪いな。それじゃ頼む。」

「おっけー」

「きちんと俺達の分をとっておけよ。」

「大丈夫だつてば。あまり遅いと分からないけどね。後、僕の方は

「いいよ。もう貰ったしね。」

「分かった。そう遅くはないはずだ。じゃ、行ってくる。」

雄二と島田は財布を持って教室を出て行った。きつと一階の売店に行っただろう。

「僕らも行こうか。」

「そうですね。」

姫路さんが抱えていたバッグを明久が受け取り、屋上まで歩く。

「天気良くてなによりじゃ。」

「そうですねー」

屋上へと続く扉の向こうは抜けるような青空。絶好のお弁当日和だ。

「あ、シートもあるんですよ。」

姫路がバッグからビニールシートを取り出す。準備万端だな。ピクニック用のセットだったりするのだろうか。

わいわいと準備を始める。幸い屋上にはだれも居らず俺らの貸し切り状態である。

「気持ちいいねー」

「清々しい気分だな。」

「……………（コクリ）」

ビニールシートに足を投げ出す。日差しと風が気持ちよかった。

「あの、あんまり自信はないんですけど……………」

姫路さんが重箱の蓋を取る。

『おおっ！』

俺らは一斉に歓声をあげた。

凄く旨そうだ。唐揚げやエビフライにお握りやアスパラ巻きなど、定番メニューが中に詰まっている。

自信がないですけど、って俺の方が自信なくすよ。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に――」

「……………（ヒョイ）」

「あつ、ずるいぞムッツリーニっ」

動きの素早い康太がエビフライをつまみ取った。
そして流れるように口に運び――

「……………（パク）」

バタン

ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「……………」

「……………」

「……………」

明久と秀吉と顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君!？」

姫路が慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とす。

「……………（ムクリ）」

康太が起き上った。

「……………（グッ）」

そして、姫路に親指を立てる。多分『凄く美味しいぞ』と伝えたいんだろう。

康太……！お前は男だよ！

「あ、お口に合いましたか？良かったですっ」

ムツリーニの言いたいことが伝わったのか、姫路が喜ぶ。だがしかし、康太は生まれたての小鹿のように足を震わせている。

「良かったらどんどん食べてくださいね。」

姫路が笑顔で勧めてくる。

そんなに嬉しそうに勧めてくると断りづらだろう……！
むしろ、どんなにまずかろうとも残さず食べてやる、という気になってくる。

だが、俺には目を虚ろにさせて、今にも死んでしまいそうな康太が忘れられない。

（秀吉、ナル。あれ、どう思う？）

姫路にきこえないくらい小さな声で明久が俺達に問う。

（…どう考えても演技には見えん。）

演劇部のエース、秀吉が言うんだ。決して冗談ではなく、素で康太は倒れ伏しているのだろう。

（康太が演技をする理由も見当たらないしな…）

（だよね。ヤバイよね。）

（明久。ナル。お主ら、身体は頑丈か？）

（正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから。）

（恐らく、一般人並みだと思う。）

表情は当然笑顔のままだ。姫路にこの会話と俺らの驚愕を気取らせて落ち込ませるのは男がするべき所業じゃない。

（ならば、ここはワシに任せてもらおう。）

勇気ある秀吉の台詞が囁かれる。

（そんな、危ないよ！）

（そつだぞ！何が入ってるか分からないんだぞ！？）

（大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのだじゃ。）

見かけによらずタフな内臓だ。ジャガイモの芽って確か結構な毒だったと思うが。

というか胃袋というより免疫力じゃないのか？

（でも……）

(むう……)

(安心せい。ワシの鉄の胃袋を信じて――)

外見は美少女でありながら、誰よりも男らしい台詞を言おうとしたところで、

「おう、待たせたな。へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

雄二登場。

「あつ、雄二」

明久が雄二を止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パク

ボタン――

ガシャガシャン、ガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本！？ちょっと、どうしたの!？」

遅れてやってきた島田が雄二にかけよる。

……間違いない。コイツは本物だ。

康太同様激しく震える雄二を見る。すると、雄二は倒れたまま明久の方をじっと見て、目でこう訴えていた。

『毒を盛ったな』と。

『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ』

そんな雄二に明久が目で返事をする。

「あ、足が……攣ってな……」

姫路を傷つけないようウソをつく雄二。やはり雄二は根が優しいな。明久にはド鬼畜だが。

「あはは、ダッシュで階段を昇り降りしたからじゃないかな。」

「うむ、そうじゃな。」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど。」

「さっきまでテスト勉強をしていたから身体が固まっていたんじゃないか？」

「なるほど、それならありえるわね。」

ふう、島田が余計な事を言う前に誤魔化せたぜ。

「ところで島田さん。その手についてるあたりにさ。」

ビニールシートに腰を下ろしている島田の手を指さす明久。

「ん？何？」

「さっきまで虫の死骸があったよ。」

嘘をつく明久。これはファインプレーだ。

「ええっ！？早く言つてよ！」

慌てて手を避ける島田。

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方がいいよ。」

「そうね。ちょっと行ってくる。」

席を立つ島田。これでリスクが低減された。

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう。」

「全くだね。」

「運が悪い。」

はっはっは、と男四人で朗らかに笑う。

一方その後ろ側で俺らは必死に作戦会議をしていた。

（明久、今度はお前がいけ！）

（む、無理だよ！僕だったらきつと死んじゃう！）

（流石のワシもさっきの姿を見ては決意が鈍る……）

（……………）

（雄二がいきなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！）

（そうかのう？姫路は明久に食べてもらいたそうじゃが）

（そんなことないよ！乙女心をわかってないね！）

（いや、わかってないのはどちらかと言うとお前の事だと――）

（ええい、往生際が悪い！）

「あつ！姫路さん、アレはなんだ！？」

「えっ？なんですか？」

明久が指した明後日の方向を姫路が見る。

（おらあつ！）

（もごああつ！？）

その隙に明久が雄二の口の中一杯の弁当を押しこんだ。目を白黒させているので、顎を掴んで租借するのを手伝ってあげている。

「ふう、これでよし」

「……お主、存外鬼畜じゃな。」

秀吉が明久に告げるが明久は無視した。
そして雄二がさらに震えている。

「ごめん、見間違いだったよ。」

「あ、そうだったんですか。」

こんな古典的な手に引つ掛かるなんて、姫路の将来が心配になるほど純粹だなあ。

「お弁当美味しかったよ。ご馳走さま。」

「うむ、大変いい腕じゃ」

雄二の大活躍によってお弁当は無事始末完了。俺らの気持ちはこの青空より晴れやかだった。

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん。特に雄二が『美味しい美味しい』ってすごい勢いで。」

視界の隅にいる雄二がフルフルと力なく首を振る。

「そうですかー。嬉しいですっ。」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二？」

倒れている雄二に水を向ける明久。

「う……うう……。あ、ありがとうな、姫路……」

ヤバい。目が虚ろだ。

「そういえば。おいしいと言えば駅前に新しい喫茶店が――」

話題をそらす明久。これ以上下手な事をいって『それじゃ、また作ってきますね』何て言われないようにする配慮。ナイスだ！

「ああ、あの店じゃな。確かに評判がいいな。」

「え？そんなお店があるんですか？」

「うん。今度今日のお礼に雄二がおごってくれるってさ。」

「てめ、勝手なこと言っとなっての。」

あ、雄二が復活した。康太は未だに復活してこない。

明久の作戦はどうやら成功したようだ。

取りとめのない会話の続く、ほのぼのした時間が過ぎる。

「あ、そうでした。」

姫路がポン、と手を打った。

「ん？どうしたの？」

「実はですね――」

「ごそごそ、とバッグを探る。」

「デザートもあるんです。」

「ああっ！姫路さんアレはなんだ！？」

「明久！次は俺でもきつと死ぬ！」

雄二が命がけで作戦を止めにかかる。ツチっていうなよ明久。

（明久！俺を殺す気か！？）

（仕方がないんだよ！こんな任務は雄二にしかできない！ここは任せたぜっ）

（馬鹿を言うな！そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできないのはできん！）

（この意気地なし！）

（そこまで言うならお前にやらせてやる！）

（なっ！その構えは何！？僕をどうする気！？）

（拳をキサマの鳩尾に打ち込んだ後で存分に詰め込んでくれる！歯を食いしばれ！）

（いやぁー！殺人鬼——！）

俺は思った——ここで食うと言えば、きっと男らしいと思われる。

実際秀吉の時は男らしいと思えた。

なら俺は男と思われる為なら命は惜しくない！

しかし男と思われたとしても死んだら実感できないじゃないか。

クウウ……

ええい！俺は男だ！女子の手作り弁当を食わなければ男が廃るぜ！！俺の男らしさを皆に見せつけてやる！！

雄二が拳を握り、あわや肉弾戦というところで、秀吉がずっと立ち上がり何かを告げようとするが、俺がその言葉を遮る。

（……ワシが——俺が行く！）——ナル！？

（ナル！？無茶だよ、死んじゃうよ！）

（俺の事は率先して犠牲にしたよな！？）

（女子の手作り弁当を食べないなんて男が廃る！そしてお前らは俺の男らしさをしかと目に焼き付けとくんだね！）

「どうしましたか？」

「あ、いや！なんでもない！」

「あ、もしかして……」

姫路が顔を曇らせる。

まさか嫌がってるのがバレたか！？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ」

言われてみれば容器に入っているデザートはヨーグルトと果物のミックス（のように見えるもの）だ。箸で食べるのは難しいかもしれない。

「取ってきますね。」

スカートを翻し、階下へと消える姫路。チャンスだ。

「よし、この間に頂くとしよう。」

戦場に向かう戦士のように緊張しながら容器を手取る。

「……すまん。恩に着る。」

「ごめん。ありがとう。」

「ワシが不甲斐ないばかりに……すまないのじゃ。」

申し訳なさで俯きがちな明久達に俺はフツと笑いかけ、言う。

「我が生涯に一片の悔いなし!」

容器を天に掲げながら口の中にデザートを丸ごと落とし呑みこむ。

「むぐむぐ。なんだ、意外と普通だとゴバあっ!」

俺にトラウマが出来た。

「……雄二。」

「……なんだ？」

「……さっきは無理矢理食べさせてゴメン」

「……分かって貰えたならいい。」

自称『男らしい男』は白目で泡を吹いていた。

その後、これからの作戦などを話したり、Bクラスに宣戦布告もしたのだが、ナルが起きることはなく。一日が終わった。

ちなみにナルが起きたのは午後7時で、保健室で寝ていたのだが真横に看病していた鉄人がいて、驚いてもう一回気絶してしまい、結局帰れたのが午後九時であった。

.....
.....

side 明久

「うあー……づかれたー」

机に突っ伏すボク。

ただでさえテストは疲れるのに、さらに朝から船越先生とひと悶着があつたから余計に疲れた。

ちなみに、船越先生には近所のお兄さん（三十九歳／独身・・・お兄さん？）を紹介てあげた。昨日の事もその件だという事にしたし。

「うむ。疲れたのう。」

「お疲れ。ほれ、弁当だ。コーラもやるよ。」

いつの間にか近づいていたナルと秀吉が答えた。ナルは僕に弁当を作ってきてくれたようだ。

今日は秀吉は髪をポニーテールにしている。ナルとお揃いだ。ううっ。

僕のストライクゾーンと真ん中だ。二人揃って男のくせに僕を惑わ

せるなんて！

「……………（コクコク）」

いつも無口で存在が薄く思われがちなムツツリー二もいる。
そして楽しみなナルの弁当をあげると――

「おお！ありがとう、ナル！さて中身は何――――僕のカロリー
があああつ！？ジュースにすらカロリーがない！？」

こんにゃくだけがぎっしり入っていた。貰った飲み物もよく見て
みるとダイエツトコーラだったし。
なんてことだ！！

「ほれ、折角明久のために作ってきたんだ。心して食べよ。」

「……………妬ましい。」

「うまそうじゃないか、明久。よかったな食うもんがあつて。」

「うう……………僕の貴重なカロリー源が……………」

……………あれ？コーラ呑みかけ……………っは！？
ナルの飲みかけのペットボトル……………ドキドキ。

「アッハッハ、まあいいじゃん。姫路が弁当作ってくるって言っ
ただろう？」

そういえば姫路さんは皆に弁当を作ってくれるんだった。

「はい。弁当を持ってきましたので……その。」

「おお、楽しみじゃのう。」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

と後ろに隠していたバッグを出してくる。

姫路さん！君は何ていい子なんだ！君のおかげで僕はもう少しは長生きできるかもしれないよ！

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい。」

「そうですか？良かった」

ほにやっと思しそうに笑う姫路さん。不思議だ。ご馳走してあげる側なのに喜ぶなんて。

やっぱり僕には優しい女の子の気持ちってよくわからない。

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……」

僕を親の仇のように睨んでいる島田。

厳しい女の子の気持ちもよくわかんない。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上に行くかのう。」

「そうだね。」

こんな腐った畳と男の臭いしかない場所で頂くものではない。屋
上の気持ちいい空間で弁当を味わうべきだろう――

ちなみにナルの弁当と呑みかけのコーラはもったいないのでドキド
キシながらしっかり頂いた。

.....

屋上に着き姫路さんの敷いたビニールシートに足を投げ出す僕。
日差しと風が気持ちよかった。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

姫路さんが重箱の蓋を取る。

『おおっ！』

僕らは一斉に歓声をあげた。

凄く旨そうだ。唐揚げやエビフライにお握りやアスパラ巻きなど、定番メニューが中に詰まっている。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に――」

「……………（ヒョイ）」

「あつ、ずるいぞムッツリーニっ」

動きの素早いムッツリーニがエビフライをつまみ取った。
そして流れるように口に運び――

「……………（パク）」

バタン

ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「……………」

「……………」

「……………」

ナルと秀吉と顔を見合わせる。

二人とも可愛い———じゃなくて。

「わわっ、土屋君!?!」

姫路さんが慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とす。

「……………（ムクリ）」

ムツリーニが起き上った。

「……………（グッ）」

そして、姫路さんに親指を立てる。多分『凄く美味しいぞ』と伝えたいんだろう。

「あ、お口に合いましたか?良かったですっ」

ムツツリー二の言いたいことが伝わったのか、姫路さんが喜ぶ。だがしかし、康太は生まれたての小鹿のように足を震わせている。

「良かったらどんどん食べてくださいね。」

姫路さんが笑顔で勧めてくる。

そんなに嬉しそうに勧めてくると断れない。

むしろ、どんなにまずかろうとも残さず食べてやる、という気にさえなってくる。

だが、僕には目を虚ろにさせて、今にも死んでしまいそうな康太が忘れられない。

「デザートもあるんです。」

「ああっ！姫路さんアレはなんだ!？」

「明久！次は俺でもきつと死ぬ!」

雄二が命がけで作戦を止めにかかる。ツチ。

（明久！俺を殺す気か！？）

（仕方がないんだよ！こんな任務は雄二にしかできない！ここは任せたぜっ）

（馬鹿を言っな！そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできないのはでкин！）

（この意気地なし！）

（そこまで言うならお前にやらせてやる！）

（なっ！その構えは何！？僕をどうする気！？）

（拳をキサマの鳩尾に打ち込んだ後で存分に詰め込んでくれる！歯を食いしばれ！）

（いやあー！殺人鬼——！）

雄二が拳を握り、あわや肉弾戦というところで、秀吉がすつと立ち上がり何かを告げようとするが、ナルがその言葉を遮る。

（……ワシが——俺が行く！）——ナル！？）

（ナル！？無茶だよ、死んじゃうよ！）

（俺の事は率先して犠牲にしたよな！？）

そりゃそうだ。見た目が美少女のナルの方が雄二よりはるかに重要度は高いんだから。

しかし、自称鉄の胃袋の秀吉より、普通の人間のナルだと危ないんじゃない……

（女子の手作り弁当を食べないなんて男が廃る！そしてお前らは俺の男らしさをしかと目に焼き付けとくんだね！）

男らしい事を口にするナル。見た目美少女だし声も少女の声であるナルが口にするとなんか微笑ましい。

「どうかしましたか？」

「あ、いや！なんでもない！」

「あ、もしかして……」

姫路が顔を曇らせる。

まさか嫌がつてるのがバレちゃった！？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ」

言われてみれば容器に入っているデザートはヨーグルトと果物のミックス（のように見えるもの）だ。箸で食べるのは難しいかもしれない。

「取ってきますね。」

スカートを翻し、階下へと消える姫路。チャンスだ。

「よし、この間に頂くとしよう。」

戦場に向かう戦士のように容器を手取るナル。

「……すまん。恩に着る。」

「ごめん。ありがとう。」

「ワシが不甲斐ないばかりに……すまないのじゃ。」

申し訳なさで俯きがちな僕たちにその綺麗な顔をこちらに向けてナルはフツと笑いかけ、言う。

「我が生涯に一片の悔いなし!!」

ナルは容器を天に掲げながら口の中にデザートを丸ごと落とし呑みこむ。

「むぐむぐ。なんだ、意外と普通だとゴバあっ！」

「……雄二。」

「……なんだ？」

「……さっきは無理矢理食べさせてゴメン」

「……分かって貰えたならいい。」

自称『男らしい男』は白目で泡を吹いていた。

第八話（後書き）

今回のside明久とかあんまりいらないかもっすね。

総合ポイントが中々伸びない。

やはり文才がなく初心者である俺には、ほかのなろうの人気作品のような物は書けないようだ。

感想……すごく、ほしいです。

第九話（前書き）

そろそろオリ主がバカテス世界に入り込んだ影響が大きく出てきます。

（原作ブレイクというんだっけ？）

もしかしたら五時だ！ 辻！

が多いかもしれません。しかし今はとても眠いので明日確認します！（今確認しろ あ）

第九話

「さて皆、総合科目テスト御苦労だった。」

教壇に立った雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

俺が姫路のデザートによって倒れた翌日、今日の午前中がテストで、ついさつき皆の全科目のテストが終わって昼食をとったところだ。総合科目勝負なんてやったものだから、皆補給のテストが多くて大変そうだった。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

一向に下がらないモチベーション。俺らのクラスの唯一の武器と言ってもいいだろう。ちなみにBクラスへの宣戦布告は昨日の事件の後に明久が身を張ってやり遂げたらしい。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は切り札、姫路瑞希に指揮を取ってもらう。野

郎共、きつちり死んで来い！」

「が、頑張ります。」

男のノリについていけないのか、若干引き気味な姫路が一步前に出る。

『うおおーっ！』

一緒に戦えるとあつて、前線部隊の士気は最高潮に達しようとしていた。

とりあえず今回は廊下での戦闘に勝ちに行くらしい。

ここで負けると話にならないから戦力もFクラス五十人中四十人をつぎ込む。そこにはFクラス最強かつ校内でも二位という学力を誇る姫路もいる。

廊下での戦闘はまず取れるだろう。

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。いよいよBクラス戦開始だ。

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

敵を教室に押し込むのが目的なので、とにかく勢いが重要だ。俺らはほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆けだした。

「あ、ナル。お前はここに残れ。」

俺だけ雄二に呼び止められた。
なんだ？

「万が一の話だが今回の作戦が失敗した時の保険に残っていてくれ。」

「もし失敗したとき俺はどうすればいいんだ？」

「ああ……その、なんだ。とりあえず失敗したらの話なんだからその時話そう。」

雄二が口を濁らせていう。
そんなに俺に言いづらい内容なのか？

「…………俺も保険。作戦内容は知ってるけど話せない。」

「なんで話せないんだ…………？まあいい。今話さなくても問題はないんだろう？」

すぐ話さないという事は下準備が必要な作戦でもないんだろう。またはすでに出来ているとか。

「…………（コクコク）」

今回は学校にいくつか仕掛けた康太の隠しカメラで様子を見れるよ

うだ。なんと音声も聞こえるらしい。

「しかし、康太。何処でこんな高性能な機械を仕入れているんだ？盗聴器といいカメラといい。」

「……………My money。（秀吉やナルの写真を使って儲けてるなんて死んでも言えない。）」

「ううー！そんなことは分かる！たまには教えてくれたっていいだろう！？」

少しくらい教えてくれたっていいじゃないか！？

「……………嘘は言っていない（ブンブン）」

……………諦めよう。

康太にいくら聞いても教えてくれないので、仕方なく隠しカメラの映像で試召戦争の様子を見る。

Bクラスは比較的文系が多いので、こちらの主武器は必然的に理系になる。

数学の長谷川先生は召喚可能範囲が広いので、一気に勝負をかける時にはありがたい先生だ。

他にも英語のライティングの山田先生と物理の木村先生もいる。

あと一人……………誰だっけ？名前忘れた……………とりあえず歴史の先生！

立会いの教師を多くして我が軍が一気に駆け抜けていた。

『いたぞ、Bクラスだ!』

『高橋先生を連れているぞ!』

Fクラスの正面にはゆっくりとした足取りでBクラスのメンバーが歩いてくる姿があった。

人数は十数人程度。相手は様子見といったところだろうか?

『生かして帰すな!』

物騒なセリフが皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス 野中長尾 総合 1943点』

VS

『Fクラス 近藤吉宗 764点』

分かってはいたがBクラスとFクラスの差はかなり大きいようだ。やはり俺が行った方が良かったのではないかと思ってしまう。

『Bクラス 金田一裕子 数学 159点』

VS

『Fクラス 武藤啓太 69点』

『Bクラス 里井真由子 物理 152点』

V S

『Fクラス 君島博 77点』

圧倒的な実力差に第一陣がごとくやられていくのが見える。とどめを刺される前にフォローしてもらわないと戦力が激減してしまう。

『お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……』

息を切らした姫路が遅れてやってきた。きっと明久達の全力疾走についていけなかったんだろう。

『なっ！？なぜFクラスに姫路瑞希がいるんだ！Aクラスじゃないのか！？』

Bクラスの誰かが叫ぶ。雄二が切り札として隠していたおかげで姫路がいるということを知られていなかったようだ。

声を聞き、Bクラス生徒の雰囲気が変わった。明らかに姫路を警戒している。

『は、はい。行って、きます。』

そのままトタトタと戦場に紛れこむ姫路。

『長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます!』

『あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしく願いします。』

早速勝負を挑まれる姫路。向こうとしては早く潰しておきたい相手なのだろう。

Fクラスの数少ない実力者だからな。

『律子、私も手伝う!』

その後ろから、さらにもう一人Bクラス女子が召喚した。Bクラスは十人くらいしか来ていないのに二人がかりなんて、よほど警戒しているようだ。

『サモン!』

喚声に応えて魔方阵が展開。おなじみの試験召喚獣が顔を出す。

敵の二体は剣と槍を構え、姫路の方は姫路の召喚獣の二倍はある大剣を軽々持っている。

そんな三人そっくりな召喚獣。ただし、

『あれ?姫路さんの召喚獣ってアクセサリなんてしているんだね?』

は?明久。腕輪の事も知らないのか……?

『あ、はい。数学は結構解けたので……』

たしか腕輪は、テストの点が400点以上の生徒の召喚獣には腕輪が与えられ、様々な特殊能力が使用可能になる。ただし能力行使には点数消費を激しくするリスクも伴うと聞いている。

デフォルメされた姫路――召喚獣は、大剣の他に左手首に綺麗な腕輪をしていた。

『そ、それって!?!』

『私達で勝てるわけじゃない!』

『向こうの二人がそれを見て顔色を変える。』

『じゃ、いきますね。』

姫路が小さな手をキュツと握りこむ。その動きに合わせて姫路の召喚獣が左腕を敵の方に向けた。

『ちよつと待つてよ!?!』

『律子!とにかく避けないと!』

大げさなくらい横に飛ぶ敵二人の召喚獣。その直後、姫路の召喚獣の腕輪が光を発した。

キュボツ!

『きゃあああーっ!』

『り、律子!』

左腕から光線がほとばしったかと思った瞬間、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が炎に包まれる。

『Fクラス 姫路瑞希 数学 412点』

VS

『Bクラス 岩下律子&菊入真由美 189点&151点』

『ご、ごめんなさい。これも勝負ですのでっ。』

大きく避けてバランスを崩した的に肉薄し、大剣を振りおろし、相手の武器ごと一刀両断し、一瞬で決着はついた。
というか姫路。何故腕輪をつかった。いまの相手なら使うまでもなかったろうに。

『い、岩下と菊入が戦死したぞ!』

『なっ!そんな馬鹿な!?!』

『姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ!』

Bクラスの残り八人に驚愕の表情が浮かぶ。
というか相手の表情まで見えるこの隠しカメラ、店の監視カメラでもこんなに高画質のを見たことないのだが。

しかし、さすが姫路。学年の成績で常に一桁にいるだけの事はある。

『み、皆さん、頑張ってください!』

姫路の指揮官らしくない指示。しかし、Fクラスにとって美少女の
声援はなによりの力になる。効果絶大だ。

『やったるでえーっ！』

『姫路さんサイコーッ！』

信者急増中。

『姫路さん、とりあえず下がって。』

『あ、はい。』

敵の士気も挫いたので、姫路に一旦下がるように言う明久。
姫路は特殊能力を使ってしまったので、点数が減ってしまっている。
それにそう簡単に姫路にやられてもらうと困るからな。

それに今なら姫路抜きでも、相手の前線部隊崩壊は時間の問題だろ
う。

『中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦死だけはするな！』

そんな相手の指示が聞こえてくる。とりあえず狙いは成功。相手を
徐々に下がらせて行って、目的のBクラスに釘付けにするくらいで
今日の戦闘は終了するだろう。

こんなに俺がいなくとも計算通りいくのは姫路のおかげだろう。

『明久、ワシらは教室に戻るぞ。』

『ん？なんで？』

戦況を眺めていた明久のところに秀吉がやってきた。
戻る？俺らのいるFクラスに何も問題は起きてないが。

『Bクラスの代表じゃが……』

『うん』

『あの根本らしい。』

根本？ああ、あの合コンの時にいた人か。
あいつBクラスの代表になったんだな。もしかしたら俺の上司にな
っていたかもしれないな。

『根本って、目的の為に手段を選ばなくて、噂では球技大会で相
手のチームに一服盛ったり、喧嘩には刃物はデフォルトだったり、
カンニングの常連だったりする。あの根本恭二？』

『うむ。』

ん？根本ってそんなに酷い奴だったのか？合コンの時の事件では
むしろ人を身を張って助けるいい男という印象を受けたが。

『なるほど。戻っておいた方が良さそうだね。』

『雄二達に何があるとは思えんが、念の為にの。』

明久が姫路に一言報告してから、明久と秀吉が数人を連れて俺達の
いる教室へ引き返した。

「ほつ、良かった。何もなかったようだね。」

「そうじゃの。」

明久と秀吉がが教室に戻って早々言う。

「ああ、何もなかったぞ。ついでに俺らはお前らの様子を隠しカメラで見えて聞いていたが、根本にはそんな卑怯な噂があるのか？俺が前にあつた時はむしろその逆の印象を受けたんだけど。」

俺が明久に疑問をぶつける。

「うゝん……僕も噂だけだから本当かどうかまでは知らないけど結構有名な話だよ。」

ふゝん…：そうなのか。まあいまのところ俺らにはそんな卑怯なことをしてないから注意するだけでいいだろう。

「明久。今日午後四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間はBクラスとFクラスの試召戦争の勝敗に関する。一切の行為を禁止する。という協定を忘れるなよ？」

「分かってるよ。その協定の調印と宣戦布告は僕が身体を張ってやったんだからね？でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有

利なんじゃないの？」

「姫路以外は、な。」

雄二が明久に注意を促したが、さすがの明久も覚えているようだ。たしかに姫路の体力で最後まで戦争をやり続けるのは難しいだろう。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる。」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないね。」

「その時は全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる。」

局所的な戦闘になるってことだろうか。それともDクラス戦の俺のように姫路がとどめを刺すとか。

「だから受けたの？姫路さんが万全の態勢で勝負できるように。」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い。」

それにしても良くBクラスがこの協定を承諾したな。

といっても相手はFクラスだから問題ないと思ってるのこともなんだろうが。後姫路の存在を知らなかったとか。

「明久。とりあえず前線にもどるぞい。教室では何もなくなるとも向こうでは何かされているかもしれん。」

そう言うと秀吉は教室を駆け足で出て行った。

「ん。雄二、いつてくるよ。」

「おう。頑張つてこいよ。だからといって戦死なんかするんじゃないぞ。」

そう言つて明久も駆け足で教室から出る。

「しかし、思つていたよりうまくいつているな。後が怖くなるくらいに。」

そしてまた、前線の様子を監視カメラで確認すると、

『運よく補給テストの範囲が中国の歴史が主だったぜ!』

『Fクラス 須川亮 歴史 302点』

VS

『Bクラス 鈴木二郎&田中明 142点&182点』

『なんだとお!? Fクラスに姫路や秋本以外にもこんな実力者がいたのか!?』

『ハッハアーっ! 中華料理を調べるにあたって、中国の歴史すべて

を調べきつたこの俺に死角はない！』

そんなことを叫びながらBクラスの召喚獣二体を棍で何回も滅多打ちにし、ボコボコにして倒した。

…なんかのび太を殴るジャイアンみたいな感じた。

というか須川ってやればできる子だったんだな。

その中華料理の熱意をすこしは勉強に回せ。絶対にAクラスいけるぞ。

ん？

なんか廊下の曲がり角で小山が頭だけだしているのが見える。なんか須川の事を見ているように見えるが……。まあいいか。

そして姫路も前線で大分活躍しているが、そろそろ疲れが溜まっているし点数の消費も激しいだろう。

そしてそんな時にアイツはやってきた……………

.

side Bクラス代表、根本

所詮Fクラスだと思い、午後四時に決着がつかないなら翌日の午前九時までの休戦を承諾してしまった。まさか姫路がいるとは思わなかった。

そして下調べで秋本奈留がFクラスにいることを知り少し驚いたが、何故か秋本はまだ表に出てこない。何か作戦でもあるのだろうか……？ その下調べのついでに秋本の好みと性格も調べたのだが。

1・男らしい人が好き。
間違われている。）
（自分が男らしくなりたいのと

2・卑怯なことは好まない。

3・根はやさしい。

このくらいしか分からなかったがこれは少しまずい。

1の男らしいはまあいい。

しかし2の卑怯な事は好まない。これはまずい。俺はこの高校に入ってから、まだ悪行がバレテはいないもののその噂がかなりたってしまっている。唯一の救いなのは噂程度で済んでいることだ。今から改心しても遅くはないのだ。

俺は秋本に好きになってもらう為、今までの自分から『生まれ変わった俺を見てくれ！』作戦を決行することにした。

まずはこのFクラス戦で男らしく正々堂々戦う男だということを手始めに我がBクラスから教えてやらねばならない。

そして今――我がBクラス前線は姫路、そしてまさかの須川のせいで教室の近くにまで押し込まれてしまっている。

しかし、敵の主戦力の姫路は度重なるBクラスメンバーとの戦いにより疲弊しているはず。

だからといって他のBクラスの奴らではまだ勝てない。

しかし、限りなくAクラスに近い成績を持つこの俺。Bクラス代表、根本恭二ならいまの姫路を倒し、

戦争の流れをBクラスに変える事ができるだろう――

いつもの俺なら姫路のなんらかの弱みを握って戦闘不能にするところだが、俺は改心したのだ。
そんな卑怯なことはしない。

「お前ら！俺がFクラスの切り札、姫路瑞希を仕留めに行く！俺の邪魔をされないように10人くらい俺についてこい！」

「し、しかし、代表が今出て行ってやられたらどうするんですか！？」

「フン！今疲れている姫路を倒さないとタイムリミットで休戦で、戦争の開始は明日になり、姫路の体力が回復してしまう！そうになったら姫路を倒すのはひと苦労だぞ！」

もしかしたらそのまま姫路によって教室に押し込まれて負けてしまう。だからBクラスで最大の点数を保有している俺ならば、今の疲弊している姫路を倒せる！そうしたら俺達の勝ちをほぼ確定だ！」

「はっ、はい！（あの代表が正々堂々と姫路と戦うのか！？）」

そうして俺達は教室を出、廊下を全速力で走りぬける。

.....

俺の標的、姫路瑞希はちょうど我がクラスメンバーを倒して下がろうとしているようだ。

「な！？敵の代表が援軍を連れて前線に出てきたぞ！？」

「なにが狙——まさか姫路さんか！？」

相手が俺らの目的に気づいたようだ。

フン、今更気付いたって遅いんだぜ——

「逃がすか！Bクラス代表根本恭二がFクラ―」

「させるか！Fクラス須川亮が……って糞！近衛部隊か！？」

「Bクラス工藤信二がFクラス須川亮に歴史勝負を申し込みます！」

「サモン！」

『Bクラス 工藤信二 歴史 159点』

VS

『Fクラス 須川亮 150点』

「良くやった、工藤！Bクラス代表根本恭二がFクラス姫路瑞希に歴史勝負を挑む！」

「え、あ！」

「サモン！」

無事、姫路に勝負を挑む事が出来た――しかし勝負はこれからだ……！

俺の召喚獣は、数珠で繋がれた二対の大鎌に陣羽織を羽織った武将

風の出で立ちだ。

『Fクラス 姫路瑞希 歴史 258点』

VS

『Bクラス 根本恭二 220点』

クツ！得意科目の歴史でもまだ点数で勝てないか！

だがたった38点の差だ！体力的にも点数的にも目に見えて疲弊している今の姫路なら勝てる！

「おらああ！」

「き、きゃあ!？」

俺の召喚獣が姫路の召喚獣に向けて鎌を横に振るが、間一髪でそのでかい大剣で止められてしまうが、もう片方の鎌が空いている。その空いている鎌も振るうが相手が力任せに大剣を振ってきたせいで、俺の召喚獣自体が吹っ飛ばされてしまう。

しかし、姫路の召喚獣は大剣を思いっきり振ったせいでバランスを崩している。

——チャンスだ!!

「うおおおおお！……！」

俺の召喚獣は大きすぎる地面を思いっきり蹴っ飛ばして姫路の召喚獣に突っ込み、

ザシュッ！

二つの鎌で切り伏した。

「Fクラス、姫路瑞希をこの根本恭二が討ち取ったり！！！！」

『おおっ！Fクラスの最大戦力を代表が倒したぞ！』

『噂で卑怯な奴だと思っていたが、そんなことはなかったんだな！』

『見直したぜ！』

『な……何て奴だ……代表自ら敵を向かい打つなんて……』

『俺らの姫路さんが補習室行きだなんて！』

「俺は目的を達成したから戻るぞ！お前らはこのまま敵の前線部隊を抑え込むんだ！」

そして俺の作戦通り姫路を倒し、手始めにBクラスから俺の認識を変えさせた。Fクラスにも俺の印象が変わったようだな。

うまくいけばこのことが秋本にも伝わるかも……！

とにかくこれでこの戦争は十中八九俺達の勝ちだ。
そんな事を考えながら俺は周りに三人の護衛を連れて教室へ戻った。

キンコンカーンコン

四時のチャイムがなり、協定通り試召戦争は一時休戦となった。

s i d e e n d 根本

s i d e 小山

『ハッハアーっ！中華料理を調べるにあたって、中国の歴史すべてを調べきったこの俺に死角はない！』

須川君かっこいい・・・！

それに合コンが終わった後、Fクラスに入ってたから頭はやはり悪いかと思っていたけど。

そんなことはなかった。

ただ須川君は勉強してないだけみたい。

だって頭が悪いならいくら好きな事でもテストで300点越えなんてできないわよね？

はううつ……なんであのとき告白断ったんだろう……

それにメルアドも合コンの時、教えてもらうのもわすれちゃった……

あああ、これからどうしようっ！？

私はどうすればいいのよー！？

s i d e e n d 小山

第九話（後書き）

Bクラス戦争は思っていたより長かったので二回に分けて投稿します。

第十話（前書き）

疲れた。間違えて一回全部文消してしまった。

一からまた書いた。

もとに戻すとか使えなかった。

しねる。

とても悲しかったです。

明日奈留の女装姿、学校で書いてこようかな。（期待しないでね。）

あと11/30から12/5まで期末テストなので試験勉強のために更新遅くなります。
申し訳ないです。

11/18 修正

第十話

『ふわ！？え、あ、ごめんなさあいい——』

西村先生によつて補習室に連れ去られていく姫路。

まさか俺らが倒すべき根本が正面からやってくるとはな……

姫路が疲弊して下がる場所を狙われた。

姫路がいなくとも敵を教室に押し込むことは出来るだろう。

しかし、その後が問題だ。

敵を教室に押し込むということは敵がそれだけ同じところに密集してしまい、守りが硬くなってしまうのだ。

その守りを抜くために姫路の火力が必要だったのだが……
その肝心の姫路は戦死してしまった。

姫路と須川の活躍で敵を15人も倒すことが出来たが、Fクラスの被害も甚大で姫路を含め20人もやられている。

残りBクラス35人　vs　Fクラス30人といったところだ。
かなり厳しい。

「想定していなかったわけではないが、まさかここで姫路がやられるとはな……」

「どうするんだ？これじゃ短時間なら教室に押し込むことが出来て

も、そこから突破することはできないぞ？」

「……すまん。ナル。保険といった作戦のことなんだがな――」

雄二が言つのを渋っていた作戦の内容を説明される。

ほうほう、なるほどなるほど――　　ってなに！？

「なんで俺がそんなことをしなくちゃいけない！？というか他の奴でもいいだろう！？」

「他の奴だと点数が足りなくて確実じゃないんだ。頼む！」

「う、うう、なあゝっ！分かったよ！やればいいんだろう！？やれば！」

「ああ、すまない。」

「……………例の物は準備してある。」

なんでおれがそんな事をやらなければいけないんだ……

雄二の作戦を聞きゲツソリとしていた時、四時を告げるチャイムが鳴った。

キンコーンカーンコーン

Bクラス戦は一旦休戦だ。

そして明久達が教室に戻ってきた。姫路も補習室に行っていたが、すぐに休戦になり皆が帰ることになったから勉強する間もなく戻ってきた。

「えっと、その、ごめんなさいい……」

「いや、謝ることはないよ。僕らもまさか代表自ら突っ込むとは思わなくて、止めることができなかったんだから。」

「そうじゃの。すまない姫路。こういう事がないようにするのもワシらの仕事じゃったからの……」

謝る姫路に慰める明久と秀吉。

「皆戻ったか？……よし全員いるな。皆！作戦を急遽変えることにした。明日はとにかく時間を稼げ！教室に押し込まなくてもいい！」

雄二がFクラス全員が戻ったのを確認すると作戦の概要を伝える。

「しかし姫路さんがいなくても勝てるのか？」

Fクラスの誰かから疑問の声が上がる。

「ああ、もし作戦が失敗した時の事はちゃんと考えてある。作戦の漏洩がないように詳しいことは話さないが俺を信じてくれ！必ずこのBクラス戦には勝てる！」

雄二がFクラスメンバーの疑問に答える。
はあ……明日の事を考えると憂鬱だ。

「とにかく明日は時間を稼げるのなら戦死しても構わんし、敵を倒すことができなくてもいい。時間を稼ぐことを念頭に行動しろ――
――それでは今日は解散する。皆御苦労だった。」

雄二が皆にもう一度念を押してから解散を宣言する。

「…………ナル。明日、八時半には体育館裏だから。」

「分かってるよ…………ハア…………」

いから敵を翻弄させるんだ！」

『おう！』

今回、部隊長でもない僕のいうことを素直に聞く皆。

姫路さんがいなくても勝てることを信じているようだ。
雄二のカリスマっぷりはやはり凄い。

キンコーンカーンコーン

九時のチャイムが鳴り響く。戦争の再開だ！

「いけえ！姫路さんのいないFクラスなんぞ所詮、俺たちの敵じゃない！」

『おおっ！』

敵の部隊長が開始早々突撃と命令している。
そしてすぐに我が軍と激突する。

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！——
勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補給も念入りに行え！」

総司令官である姫路さんがいないので今は副司令官である秀吉が指揮をとっている。

「左出入り口、押し戻されています!」

「古典の戦力が足りない!援軍を頼む!」

押し戻された左にいるのは古典の竹中先生だったか。

まずいな。Bクラスは文系が多いので、強力な個人戦力で流れを変えないと一気に突破される恐れがある。

くっ!姫路さんがいれば……いや、いない人のことを考えても仕方がない。

「左出入り口は押し戻されても構わない!だから無駄な戦死だけはやめるぞ!」

しかし突破されるのもやはりまずい、仕方ない。あの手を使うしかない!

「だああっ!」

掛け声と共に人ごみを掻き分け、左側の出入り口にダッシュ。
そして立会人を行っている竹中先生の耳元でささやく。

「……ッラ、ずれてますよ。」

「っ!!」

頭を押さえて周囲を見渡す竹中先生。

いざという時の為の脅迫ネタ〜古典教師編〜をこんなところで使う羽目になるなんて。これは計算外だ。

「少々席を外します!」

狙い通り少しの間が出来る。

「古典の点数が残っている人は左出入口へ! 消耗した人は補給に回って!」

応急処置だけど、これで少しは持ち直すはずだ。

「右側出入口口、教科が現国に変更されました!」

「数学教師はどうした!」

「Bクラス内に拉致された模様!」

右側までもBクラスの得意とする文系科目に切り替えられるなんて結構ピンチだ!

そして僕たち前線部隊は着々とBクラスに戦力を削られていく。
現在、戦争を始めてから1時間半といったところだ。

もう、そう長い時間を稼げられそうにない！いつになったら雄二の
いう作戦が始まるんだ！？

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集ま
りやがって。暑苦しいことこの上ないっての。」

いつまで時間を稼げばいいのかと焦っていると、Bクラスの教室の
ドア近くから、根本君の声が聞こえてきた。

「どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

後ろから聞きなれた雄二の声も聞こえてきた。

僕たちは劣勢になってきているので時間を稼ぐのに、雄二率いる本
隊まで出動せざるを得なくなったのだらう。

そして何故か保険体育の教師、鉄人がBクラスの教室に入っていく。

「はア？ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな。」

「そうか？頼みの綱の姫路さんもないんだぜ？」

相手は姫路さんがいないので決して負けるとは思っていないようだ。

「……お前ら相手にはいなくても問題はないからな。これからのために勉強させてるのさ。」

「けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよお。」

「負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな。」

雄二がやけに強気だ。もう作戦は実行されているのか？

「……………態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

雄二がものすごいニヤケている。

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！？」——どうした工藤。俺になんか用か？」

すこしイラついた様子の根本にBクラスの工藤君が背中を叩く。

——あれ？僕の知っている工藤君とはすこし雰囲気が違うような

……………

「…………… Fクラス、土屋康太」

「っ！？」

まさかムツツリーニ！？

根本や周りも気づき、根本は慌てて逃げようとし、周りは間に入ろうとするが、間に合わない。

「キ、キサマ……………！」

ムツツリーニが桂を取りながら言う。

「…………… Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む。」

「ムツツリーニイーツ！！」

「サモン」

『Fクラス 土屋康太 保健体育 441点』

VS

『Bクラス 根本恭二 203点』

ムツリーニの召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

明久

•

1

Sidナル

にいる。

そして今、俺は

女装をしている。

ちくせう！俺だって好きで女装をしている訳じゃない！！
めちゃくちや恥ずかしいんだぞ！

では何故女装なんぞをしているのかと言うと。

Bクラスの工藤（愛子じゃないよ？）という男を暗殺（殺さないけどさ）して康太と入れ替えるという作戦を決行しているのだ。

しかし、さすがにルール違反で直接手をだして工藤を拉致するのはよろしくないなので代わりに補習室に行ってもらう方法をとる。

作戦内容は、

・康太が工藤になんらかの方法で偽の告白の手紙を渡す。
<内容は午前九時半に1階の空いている実習室で待っている。って感じ>

・俺が八時〜九時の間に女装する。（別に約束の時間までに女装すれば問題ない。）

・そして、工藤が来たら数学勝負を挑み、倒して西村先生に補習室に連れて行ってもらう。

・入れ替わる。

大体こんな概要だ。

前にもいったように数学の長谷川先生は召喚可能範囲が広いのでBクラスで召喚フィールドを形成していても、一階下のこの実習室にまで届くのだ。
それを利用するのである。

ちなみに一階下にまで召喚フィールドを形成できるのは長谷川先生以外に不可能だ。
このことを何故知ってるのかというと、康太の謎の情報網に引っ掛かっていたそうだ。

あと入れ替わる相手を工藤に選んだ理由は、
髪の毛が長く前髪が鼻くらいまで伸びているから顔が半分くらい隠れてるし、体格、背の高さも康太とほとんど一緒なので、
他の人物と比べて比較的に入れ替わりやすいのだ。

そもそも、入れ替える理由は、Bクラスを突破するのは今のFクラ

スの現状では不可能なのだ。

しかし、潜入という形を取れば真正面からBクラスの前線を突破するよりは、根本の首を討ち取ることできる可能性が高い。

だからこの作戦を決行することになったのだ。

じゃあなんでわざわざ俺が女装して呼び出すの？

普通に他の方法とかで呼び出せばいいじゃん。それに工藤を呼び出すのは他の人がやっても問題ないじゃん。

そう思うだろう？

しかし、工藤にとってどうでもいいような内容で呼び出すのは当然不可能だ。

だってちようと試召戦争の真っ最中に呼び出されるのだ。

すこしくらい重要な内容でも大事な戦争中に抜け出せるわけがない。

しかし、告白といった話なら別だ。

もし、告白の内容が本当だとしたら、せっかくの嬉しいイベントをみすみす投げ出してしまうのと同義だ。

俺なら絶対行く。

今までに告白されたことはあるがすべて男子だった。粉バナナ！！

とにかく俺だって彼女がほしいのだ。

若干恋愛に疎いと自分でも思っている俺がそうなのだ。

他の一般男子高校生はさらに彼女が欲しいと思っているだろう。
リア充爆発しろって言葉があるくらいだな。（違
俺もよくそう思う。

あと俺がこの作戦をやらなきゃいけないのは工藤を倒すには他のF
クラスメンバーじゃ難しいからだな。

俺の他にやれそうなやつは姫路くらいだ。

そして計画通り、九時半になり工藤が来た。

うう、別に本当に告白するわけじゃないがそれでも恥ずかしいし、
女装姿を見られるというのもさらに恥ずかしい。

「え、えっと。君が僕をここに呼んだのかな？」

工藤がすこし驚愕そうな表情を浮かべてから顔を赤くし俺に質問を
する。

今の俺は髪を下ろし前髪で顔の左半分を隠しているので、俺が秋本
奈留だと気づかれていないようだ。

「は、はい！えっとその……………ごめんなさい！」

「へっ？」

「Fクラス秋本奈留が工藤信二に数学勝負を申し込みます！」

俺は恥ずかしさで顔を今までで一番かと思っほど赤くし、一刻も早く終わらせたかったので早速倒すことにする。

「サモン！」

『Fクラス 秋本奈留 数学 257点』

VS

『Bクラス 工藤信二 121点』

そして相手が驚いて固まっている間にハルバードを使い一瞬で切り伏せる。

そしていまだに呆然としている工藤をどこからともなく現れた西村先生が連れてゆく。

………すまない少年よ。今度機会があったならこの埋め合わせをするよ。

「…………さすが奈留。（着替え写真から赤い顔まですべて写真で撮った！）」

隠れていた康太が出てきた。

「俺にここまでさせたんだ。絶対根本を倒せよ。」

「…………（コクコク）」

そして康太は工藤の髪型にそっくりなヅラを被り、Fクラス用のネクタイをBクラス用と交換してから、この部屋から出て行った。

あつ、俺も保健体育の教師を探してBクラスに入れてやらないと。

……………

ちなみにどうやってBクラスの中に康太が紛れ込んだかというと普通に戦闘中で荒れている廊下を走りぬけて普通に教室に入ったらし

い。戻る際の建前は状況報告として教室に戻ってきた。との事。

あと、潜りこんですぐ根本を倒さなかったのは、保健体育の先生がいなかったから倒せなかっただけである。

第十話（後書き）

つかれた。ストーリーでもし 矛盾点があったら報告くれるとありがたいです。

もしかしたらオリ設定の書き忘れだったり、単純なミスだったりがあるかもです。

ちなみにいくつかオリ設定があります。

長谷川教師のフィールドは二階から一階にまで届くとかです。

あと結局今回もナルあんまり活躍なし、つぎこそは……！

第十一話（前書き）

かなり遅れてすいません。

テストが終わってから

今ニコニ 動画ではやりのふしぎなくすりシリーズを書いてました；
；

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm12981879>

小説書かずに何やってるんだって話ですよ。 すいません；；

今回の話はすこし短いかもです。

第十一話

「さて、それじゃ嬉恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……………」

床に座り込んでいる根本君。さっきまでの強気が嘘のようにおとなしい。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らに素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

その言葉でうちのクラスの皆はどこか納得した表情になった。Dクラス戦でも言った事だし、雄二の性格を理解し始めているのだろう。

「おーい、戦争はおわったかー？」

僕らがBクラスと交渉している間にBクラスのドアが開く音がなり、ナルのものだと思われる声がした。

「ナル？戦争は勝ったよ。今までどこにいたn……」

僕が後ろに振り向きながらその問いに答えるのと一緒に今までここにいたのかという疑問もぶつけようとしたのだが……

「うん？皆揃って固まってどうしたんだ？」

そこにいたのはナルじゃなくて、前髪がちょっと目にかかるくらいで腰に届きそうな真つすぐ下ろした髪、文月学園の女子制服を着た女の子がいた。

「えっと……失礼だけど君どつかであつた事あつたかな？」

その女の子は自分が思うに……その、かなりかわいい。顔の全体像も見えないのにもかかわらずだ。

ちよつと胸がないけど逆にそれがバランスが取れているように見える。

どこかで見た事がある気がする。

こんなに可愛い娘一目でも見たら忘れないうつんだけどなあ……？

雄二や根本も誰か分かっていないようだし、他のFクラス、Bクラスの皆も同じような反応をしている。

いや雄二は確かに驚いていた様子をしていたがすぐに納得したような顔をした。

雄二はこの娘が誰なのか知っているようだ。

「……ついに明久は友達顔を忘れるほどバカになったのか。」

「明久がとてつもないバカなのは常識だろう？ そんなことよりいいのか？ ナル」

雄二がそう言いながら女の子の身体の辺に顎で指す。

いますぐ雄二に制裁をしたいところだが、それどころじゃない。この娘がナル？ あの決して自分の事を女と認めないあのナル？

「なんの話だ？ …………… あっ」

ナルらしき女の子が自分の服を確認するとどんどん青い顔になっていく。

「う、あ、あ、………… ツ？」

そしてブンッブンッと周りを見渡す。

「ああ……着替えるの忘れてたああああ！？ つみ見てない………… 訳ないよね………… つちょ康太！ 俺の服はどうした！？」

「………… 体育館裏に置きっぱなしのはず」

「ええ！？う、にゅああああああ！俺の服うううう！」

顔を青くなったり赤くなったり涙目になりながら慌てるナル。
やばい。果てしなく萌える光景だ。
そのまま教室から走り出ていった。

「…………ムツツリーニ。写真は？」

「（ビクッ）…………つい撮るのを忘れてた」

「ムツツリーニにしてはめずらしい失態だね」

「……………だけど他のナルの写真を大量に入荷した」

「一枚いくら？」

「……………（ゴニョゴニョ）」

「くう……………今月分の生活費が厳しくなるけどやむを得ない。買った
！」

しかしナルの女装？姿を見れたのは幸運だった。というか初めて見たよ。

「土屋。俺にも売ってくれ」

ん？根本君もナルの写真欲しいのかな？
ナルのファンがどんどん増えていくね。

「……………金さえ払ってくれば誰にでも売る」

そう。ムツツリー二はムツツリ商会なるものを経営しているのだ。

活動内容は文月学園の人気のある人物の写真を文月学園生徒限定に
売っているのだ。

写真だけじゃなくそれを利用した抱き枕なども販売している。

その収入がどのくらいあるかは常連である僕にも詳しく分からない
が、高性能な盗聴器具などをたくさん買える程度にある事ぐらいは
分かる。

ちなみにその中で特に人気なのは秀吉、ナルである。

「コホン。あー……………もう話を再開してもいいか？」

雄二が話の流れを戻す。

あー、そういえば今はBクラスとの交渉をしている最中だった。

「……………条件は何だ」

「とりあえずBクラスにやってもらいたい事はだな。Aクラスに行
って、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今
回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はす
るな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と
準備があるだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

疑うような根本君の視線。

「ああ、そうだ。なんども口にしたセリフだが俺達の目標はあくまでAクラスだ」

「それはこちらにとっても助かる話だ。受けよう………いついけばいい？」

「ふむ……今すぐにもしてくれたら助かる」

「分かった。早速行ってこよう。本当に施設はいいんだな？後からやっぱりAクラスは無理だからBクラスのを寄越せ。というのはナシだからな？」

「当然だ。約束は守る」

根本君はフンツといいながら早速Aクラスに向かって行った。

「……雄二。いよいよAクラス戦だね。けどBクラスでさえ勝つのが厳しかったのにAクラスになんか本当に勝てるの？」

「その話は明日しよう」

「そう？まあいいや」

そうして僕たちはいつまでもBクラスにいるわけにもいかないのでFクラスに戻った。

ああ……なんということだ。

急いで保健体育の先生を探さないと。とずっと考えていたせいですっかり男子制服に着替えるのを忘れていた。

……！ということは俺は先生を探している最中約一時間ずっと校内を女装しながら走り回っていたのか！？

いい、い、いや！ 女装してるんだから俺が誰なのか分からないはず！それに一応他のクラスは授業中だったから見られていないはずだろう。

ふう。無駄に焦ってしまった……って何の解決にもなってねえ。Fクラス、Bクラスの面子には思いつきりバレてたじゃないか……

……
しかも先生を探すのに職員室にも入ったから他の教師にも見られた
ってことになる。

その後、西村先生（保健体育教師）を見つけてBクラスに行くよう
にと言った。

つまり西村先生にすら見られたのか。

……でも職員室でも西村先生にも自分に対して何の疑問（ほら男
が女子制服を着ているなんておかしいだろう？）もぶつけなかった
のが一番気になる。

そうしたらF、Bクラスの皆にこの醜態を見せずに済んだものを。

……気付かなかった？い、いやそんなはずはない。

きつと前髪で顔半分を隠してるから分からなかったただけだろう。

そうだ。そうに違いない。

そんな事を考えながら俺は体育館裏に置いたままの服を取りに行く
為に廊下を走っていたのだが。

曲がり角に誰かがいたので急停止した。しかし間に合わず、勢いこ
そなくなつたものの誰かにぶつかってしまった。

「つきや！？」

「はう！？」

先に誰かが声を上げ遅れて俺も声を上げてしまった。

俺はぶつかつたせいでバランスを崩し転びかけたのだがぶつかつた
相手に転ばないように両手で抱き押さえられた。

「大丈夫？キミ」

「す、すいません！大丈夫です」

ぶつかった相手は合コンの時にいた工藤愛子だった。

そういえばもう授業が終わって次の授業までにある休憩時間だった。

「廊下は走っちゃ危ないよ？……んん？君どつかで会ったよ
うな……？」

「ギクツ！……き、気のせいじゃないですかね！？それに同じ学
校の生徒なら顔ぐらい合わせるんじゃないかな？」

やばい！今更俺の女装を見た人が増えてもいまさら変わんないよう
な気もするがそれでもやはりバレたくはない。

「んゝまあそれはそうなんだけどね……」

「…………じ、自分急いでるんで、じゃ！すいませんでした！」

ガシッ！

バレる前に体育館裏に向かう道に身体を向けて走り出そうとしたの
だがその前に両肩を掴まれた。

結構強い力で掴まれているので逃げられない。

そして工藤は俺の顔をじっと見つめてくる。

ま、まずいこのままじゃバレる！って、ちょ！顔近い！

ジーン

ダラダラー

冷や汗が止まらない。

「……………秋本君？」

バレた！

「ひ、人違いです。（プイ）」

苦し紛れだが誤魔化す為に顔を横に背ける。

あ、やばい。工藤が凄いニヤけてる。

「ふーん。人違いか？でもポニーテールとか似合いそうだねー？

そう、秋本君のように」

「そんなことないでござんすよ？」

「なんか変な方便が混ざってるよ？せっかく可愛い顔してるんだから前髪で隠すなんてもつたいないよ」

「い、いいですから！放してください！」

「ここで会ったのも何かの縁だし女の子同士の交流を深めようよ。……おっと丁度いいところに髪留めのゴムが。」

「違う！俺はおとっ……じゃなくてとにかく急いでるんですっ！」

「おとっ？おとがどうしたのかなぁ？」

「うう、う」

くそっ！ここで俺が男というわけにもいかないし……

ふぁさっ

「ッ！？」

「ほら。やっぱりかわいいじゃん。……これをこっしてっ」と

俺がどうしようか迷っている間に抵抗する暇もなく前髪をどかされポニーテールにされた。

「で、秋本君どうして女装してるの？とてつもなく自然だけど」

「ガクツ……………結局バレた……………」

「ああ。なるほど。本来の性別が女だったけど訳ありで男として過ご「違うから！Bクラス戦での作戦で必要だったんだよ！」そうなの？……………戦争で女装が必要ってどうしたら繋がるの？」

俺は諦めて事情をすべて工藤に話した。

もちろん俺達の目標がAクラスなのとAクラス戦にかかわる話はない。

一応工藤がAクラスということはたまたまだけど知ってはいたからね俺。

「……………つぶ、ククツ、アハハハハ！」

「わっ笑うなよ！こっちは真剣にやってたんだぞ！」

「アハハ……………ハア……………ププツ、ご、ごめんごめん。でもさ女装しなくても成功したんじゃない？」

「全く……………ん？女装しなくてもできたってどうゆうことさ。女装しなくちゃ相手に気付かれるじゃないか」

もし女装しなくて済んだなら俺は何のために女装したんだ。

「だって相手が待ち合わせ場所に来る時までには姿見られないんだから。これが罠だと気付かれてもすぐ倒せば済むんじゃないかな？」

「あ……………」

「……………」

「……………」

この沈黙が辛い。

「……………」

「ちょ…………元氣だしなよ。きっと無駄じゃなかったんだよ。何か他に理由があったんだよ（すごい悲しそうな目をしているよ！）」

「うん……とりあえず着替えるために体育館裏にまで取りに行ってくるよ」

女装しなくても済んだという事に気付いた俺は自分がした事が無駄だとわかりかなり沈んだ気持ちで体育館裏までフラフラと歩いて行った。

アハハッ……

第十一話（後書き）

微妙な感じで終わった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7998o/>

バカとテストとオレっ娘（笑

2010年12月12日13時23分発行